第 7 回ユネスコスクール関東ブロック大会　報告書

2026 年 8 月 4 日（火）に千葉商科大学で第 7 回ユネスコスクール関東ブロック大会が開催された。総参加者数は 296 名に及んだ（ただし、あくまで受付を済ませた参加者数であり、実数はもっと多かった可能性がある）。開催概要は以下の通りである。

日時　2026 年 8 月 4 日(火) 10:00～17:00
場所　千葉商科大学 7 号館
参加費　無料
テーマ　生きること　食べること
学内ツアー　環境団体 SONE の学生がキャンパスにある省エネ・創エネ関連設備を案内するツアー(所要時間:30 分程度)を 12:00 と 13:00 に実施。
主催　千葉商科大学
共催　成蹊大学、創価大学、玉川大学、東海大学、かながわユネスコスクールネットワーク(KAN)
協力　公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)
後援　ESD 活動支援センター、関東地方 ESD 活動支援センター、ユネスコスクール支援大学間ネットワーク(ASPUnivNet)、千葉県高等学校教育研究会 ESD 部会、市川市教育委員会、市川市ユネスコ協会、八千代市教育委員会

プログラムについては、以下の通りである。

全体挨拶・趣旨説明・基調講演　10：00～ 7 号館 702 教室
全体挨拶／千葉商科大学　学長　宮崎 緑
趣旨説明／千葉商科大学　准教授、サステナビリティ研究所　副所長　影浦 亮平
基調講演「サステナブルな社会をつくる食と農」／千葉商科大学　准教授　小口 広太

特別対談　11：00～ 7 号館 702 教室
「学校が挑むサステナビリティ～『社会を変えたい』学生たちと本気で歩んだこれまでとこれから～」／千葉商科大学＆自由の森学園
自由の森学園：理事長 鬼沢真之、高校 3 年 稲留ふたば
千葉商科大学：防災・エネルギーセンター長/教授　手嶋進、学生環境団体 SONE 代表　田口美波
ファシリテーター：株式会社 UPDATER　沖山 敬

スペシャルレクチャー　11：00～ 7 号館 701 教室
「いま、日本で『将来の夢』を考えるのはなぜつらいのか? 会社と社会、人の変化を捉える」／千葉商科大学　教授　常見陽平

活動発表①　13：00～ 7 号館 702 教室　司会：千葉商科大学　准教授　中倉智徳

1.「エシカル学生クラブの取り組み」／千葉商科大学エシカル学生クラブ
2.「僕たちの、未来への挑戦 2025／4 年生ユネスコチャレンジ Project」／湘南学園小学校
3.「和洋九段の ESD～シンガポール修学旅行を通して学ぶ SDGs～」／和洋九段女子中学校高等学校
4.「成蹊学園の環境を活かした中高大連携と地域連携その 1：ケヤキがつなぐ、自然と食のひととき」／成蹊学園①

活動発表②　14：00～ 7 号館 702 教室 司会：（千葉商科大学　教授　権永詞→）千葉商科大学　准教授　中倉智徳
1.「成蹊学園の環境を活かした中高大連携と地域連携その 2:キャンパスの資源を起点としたサステナブル農体験」／成蹊学園②
2.「私たちとカンボジア～海外研修旅行後の成長～」／常磐大学高等学校
3.「エコキャップ運動×参加型デジタル管理システムの取り組みについて」／市原中央高等学校

分科会①　13：00～ 7 号館 701 教室
「千高教研 ESD 部会の歩みと「高校生による日韓ユネスコスクール協働・共同スタディツアー」について」／千葉県高等学校教育研究会 ESD 部会

分科会②　14：00～ 7 号館 701 教室
千葉商科大学　奥寺葵教授ゼミによる研究発表「働くことから考える、持続可能な未来　会社をすぐ辞める？休みは取れる？大学生が、若者の働き方から持続可能な社会を考えます。」／千葉商科大学　教授　奥寺 葵ゼミ

分科会③　13：00～ 7 号館 711 教室
「「食べること」から見えてくる持続可能な未来-ユースによる SDGs 授業提案」／玉川大学教育学部、大妻中野中学校・高等学校、東京都立山崎高等学校

分科会④　13:00～ 7 号館 731 教室
「選んで考える! 食文化と持続可能な未来」／創価大学ユネスコクラブ

ポスターセッション　14：00～16：00　7 号館アトリウム
1.「未来を生きる私たちのために」／八千代市立大和田南小学校
2.「おいしさで地域を盛り上げ隊」／八千代市立大和田西小学校
3.「ユネスコスクールとしての取組」／八千代市立萱田中学校
4.「福島学」／創価高等学校(1)
5.「核廃絶問題」／創価高等学校(2)
6.「総合的な探究の時間における有馬 ESD の実践」／神奈川県立有馬高等学校
7.「藍から広がる”あい”の輪」／宇都宮大学共同教育学部附属特別支援学校
8.「シンガポールの企業訪問」／和洋九段女子中学校高等学校
9.「持続可能な社会の創り手になろう！SDGs で取り組む「地域・国際社会」貢献・活用・

協働・発信の実現に向けて」／東京都立多摩桜の丘学園
10.「地域と企業とともに育む”生きる力”-「産官学民」連携の実践-」／新座市立片山小学校
11.「自由の森学園の取り組み」／自由の森学園
12.「日本茜を題材とした地域課題の解決に向けた探究学習の実践」／千葉県立成田西陵高等学校
13.「学外に向けたカーボンニュートラルの啓発活動」／千葉商科大学学生環境団体 SONE
14.「エシカル学生クラブの活動」／千葉商科大学エシカル学生クラブ
15.「サステナブルな社会をつくる人社の魅力を発信」／千葉商科大学人間社会学部プロジェクト実習:人社プロモーション・プロジェクト
16.「大学生の防災意識と備えの実態に関する調査報告」／千葉商科大学人間社会学部プロジェクト実習:防災コミュニティ・プロジェクト
17.「高校生とつくる須賀川メタバース観光」／千葉商科大学人間社会学部プロジェクト実習:地域探求型メタバース・プロジェクト
18.「市川の観光魅力の考察と情報発信」／千葉商科大学人間社会学部プロジェクト実習:市川観光プロモーション・プロジェクト
19.「大学生がつくる夏休みの子どもの居場所」／千葉商科大学人間社会学部プロジェクト実習:地域の子育て共創プロジェクト
20.「踏み間違え事故防止を目指す探求―アクセルブレーキ表示装置を例に考える―」／千葉商科大学人間社会学部プロジェクト実習:ペダル踏み間違い防止 PJ
21.「地域のサードプレイス」／千葉商科大学人間社会学部プロジェクト実習チーム:域学連携～地域の居場所作り～
22.「支援活動への謝礼金に関する調査報告」／千葉商科大学人間社会学部プロジェクト実習:有償ボランティア・プロジェクト
23.「観光が地域社会に与える影響」／千葉商科大学人間社会学部プロジェクト実習チーム:アドベンチャーツーリズム・プロジェクト
24.「アートと地域をつなぐこころみ」／千葉商科大学人間社会学部プロジェクト実習チーム:いちかわアートイベント・プロジェクト
25.「原爆遺産としての〈いきもの〉の社会学的研究　被爆樹木が編む「記憶の場」の可能性」／藤井紘司（千葉商科大学　准教授）

まとめ・講評、表彰式、閉会　16:20～

影浦亮平司会の下、中倉智徳氏による活動報告①・②のまとめ、町田登志子氏（千葉県高等学校教育研究会 ESD 部会・松戸国際高等学校）による分科会①のまとめ、奥寺葵氏による分科会②のまとめ、小林亮氏（玉川大学）による分科会③のまとめ、舟生日出男氏（創価大学）による分科会④のまとめ、浅野春佳氏（ACCU）によるポスターセッション全体の講評、小田宏信氏（成蹊大学）による優秀なポスター発表の表彰、富岡比呂子氏（創価大学）による次年度開催校挨拶、影浦亮平による閉会の挨拶があった。

優秀なポスター発表の表彰について、参加者の投票により（ただし、藤井紘司氏によるポスター発表は大学教員による研究発表だったため、投票先から除外した）、1 位から 3 位まで表彰した。受賞した学校は以下の通りである。

【ポスターセッション順位】

①最優秀賞　　八千代市立大和田西小学校

②優秀賞　　千葉商科大学　人間社会学部いちかわアートイベント・プロジェクト

②優秀賞　　八千代市立大和田南小学校

③優秀賞　　創価高等学校①

③優秀賞　　和洋九段女子中学校高等学校

③優秀賞　　千葉県立成田西陵高等学校



宮崎学長の全体挨拶の様子



小口氏の基調講演の様子



ポスターセッションの様子



まとめ・講評の様子



ポスターセッションの表彰の様子



次年度開催校挨拶の様子

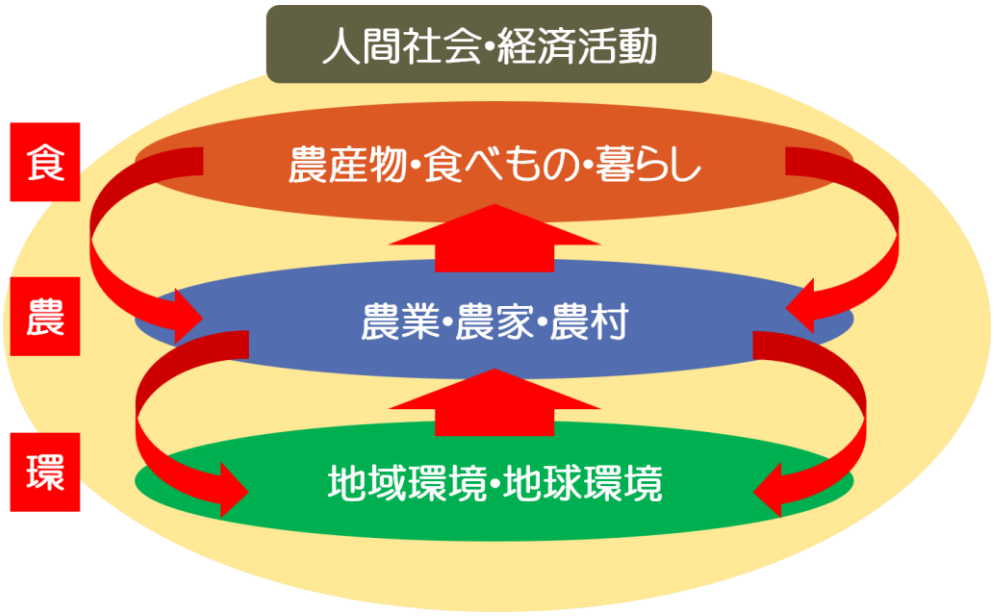
基調講演

運営者/発表者
千葉商科大学人間社会学部准教授　小口広太
内容

基調講演「サステナブルな社会をつくる食と農」

１．サステナブルな社会の実現に向けて

これまでの社会は、経済のグローバル化、大量生産-大量消費、急速な都市化によって地球環境の破壊や生物多様性の喪失、農山村の衰退をもたらした。コロナ禍が収束し、これからはポスト SDGs も視野に入れたサステナブルな社会をつくっていく必要がある。



食は生命を再生産し、その食は農の営みがなければ生み出されない。そして、農の営みは環境によって維持されている。「食」「農」「環境」の好循環がサステナブルな社会をつくるための土台となる。

２．熱くなる地球

地球のあらゆる場所が暑くなり、記録的な猛暑、度重なる大雨やゲリラ豪雨など異常気象が頻発している。2023 年 7 月、アントニオ・グテーレス国連事務総長が「地球温暖化の時代は終わり、地球沸騰の時代が到来」と警告を鳴らした。

2025 年 4 月に日本農業新聞と民間企業が共同で実施したアンケート調査では、約 1 割の農家・農業関係者が「農業を続けられないほどの打撃」を受けていることが明らかとなった。「農業はなんとか続けられるが深刻な打撃」を含めると 7 割にもなる。

基幹的農業従事者（ふだん仕事として主に自営農業に従事している者）は、2010 年の 205 万 1,000 人から 2026 年 2 月時点で 98 万 6,600 人となり、この 15 年間で半減した。そのうち 70 歳以上が 5 割、65 歳以上を含めると 7 割を占めている。気候変動は、このような生産現場の脆弱化に追い打ちをかけている。

３．食・農・地球環境のつながり

現代の食料システムは、「工業化」「広域化」「複雑化」が特徴で、地球環境問題と密接に関係している。IPCC によると、食料の生産から流通、消費、廃棄に至る段階で排出される温室効果ガスが総排出量の 23～42%に相当するという。食と農は、地球沸騰化の被害を大きく受けているが、その加害者でもある。

2025 年度（概算）の食料自給率（カロリーベース）は、前年から 1 ポイント下げて 37%となり、海外への食料依存が進んでいる。食料を輸送するために、多くのエネルギーを使用する。日本は食料を大量かつ長距離で輸送し、多くの温室効果ガスを排出している。

４．食・農・地域環境のつながり

農業は、食料の供給以外に生産活動をつうじて「国土の保全」「水源の涵養」「自然環境の保全」「生物多様性の保全」「良好な景観の形成」「文化の伝承」など多面的な機能を発揮している。





水田は、雨水を一時的に貯留し、洪水や土砂崩れを防ぐダムである。気候を緩和し、美しい農村の風景を生み出す。農業体験、棚田オーナー制度のように、教育、体験・交流の場もつくり出している。

農業が発揮する多面的機能は、誰もが受けている恩恵＝公共的な価値である。これは、「農の恵み」と言い換えることができる。生産者と農地が減少すれば、この恵みも失われる。私たちの食の選択が農業を守るだけではなく、多面的機能を育むことにつながる。

５．サステナブルな社会をつくる食と農

現在、食と農のブラックボックス化が進展し、誰が、どこで、どのような栽培方法、思いで生産しているのかほとんど知ることができない。消費者の無関心がさらに生産者との人間的な距離を拡大させている。そのため、生産者と消費者がコミュニケーションを図ることができる仕組みづくりが求められている。その関係性から生まれる共感によって、生産者と消費者の人間的な距離が縮小し、食と農が環境に根差し、環境によって食と農が支えられるという好循環が生まれるだろう。

特別対談

運営者/発表者
自由の森学園：　理事長 鬼沢真之、高校 3 年 稲留ふたば 千葉商科大学：　防災・エネルギーセンター長/人間社会学部　手嶋進、 学生環境団体 SONE 代表/商経学部 3 年　田口美波 株式会社 UPDATER：SX コンサル&イノベーション本部 沖山 敬（ファシリーテーター）
内容

学校が挑むサステナビリティ

～　『社会を変えたい』学生たちと本気で歩んだこれまでとこれから　～

自由の森学園と千葉商科大学は、組織として、また教育としてサステナビリティの実践に力を入れてきた。両校がそれぞれ活動の工夫などを語り、参加者の皆様と情報を共有することは実践活動を広める上で有意義と考えられる。そこで両校の対談企画を行った。前半では各校の活動を紹介し、後半ではトークセッションの形式で対話を行った。



セッションの様子

1.　各校の活動紹介

①　自由の森学園の取り組み

埼玉県飯能市にある自由の森学園中学校・高等学校の ESD の実践と脱炭素経営について、鬼澤理事長が報告した。自由の森学園は 1985 年に、点数や競争を動機とした教育を排し、主体性や内発性を土台とする教育づくりをめざして開校した。中山間地にある学園として、開校以来、地域と地球環境に関する教育実践には力を注いできたが、2009 年からは地域の森林木質バイオマス資源を利用した体育館暖房を始めた。その後、100%再生可能エネルギー電力の導入、2021 年には学校寮の給湯と暖房にもバイオマスボイラーを設置した。また、生徒の天ぷら油プロジェクト（現在サステナ委員会に改称）とともに、廃食油の回収を行い、それを原料とした BDF（バイオディーゼル燃料）で公用車を稼働させる取り組みを行っている。これらによって、取り組み前に比してお

よそ 90%の二酸化炭素の排出を削減している。続いて、サステナ委員会の高校 3 年生の稲留が、活動報告を行った。天ぷら油プロジェクトから始まり、昨年は全校へ節電を呼びかけた節電プロジェクトなど、活動の範囲が拡がった。一部の生徒有志で始めた活動が委員会として昇格し、現在は地元自治会も廃食油回収に協力してくれることになったなど、活動の展開を報告した。

② 千葉商科大学の取り組み

防災・エネルギーセンター長の手嶋から、2017 年から千葉商科大学が組織横断的なプロジェクトとして、省エネルギーと太陽光発電の活用を進めてきたことが報告された。大学のキャンパスで消費するエネルギー相当量を、再生可能エネルギーで創ることができれば、総量として二酸化炭素の排出を実質ゼロにできる。省エネでは、LED 照明の導入や空調温度設定の見直しなどを行い、現在までに 150 回を超える施策検討会議を続けている。再生可能エネルギーについては、野田市の野球練習場跡地のメガソーラー、キャンパス建物の屋上、大学の関連会社が所有する千葉市内のサツマイモ畑（ソーラーシェアリング）の 3 箇所で太陽光発電を行っていることが説明された。

次に、学内外で環境や省エネについての啓発活動を行っている学生環境団体 SONE で代表を務める田口が、学生による取り組みを説明した。学生が小学校を訪問し、地球温暖化の授業を実施したことや、千葉県による若者向けカーボンニュートラルの啓発活動企画を支援したこと等が報告された。次の春休みには、学生が内窓を制作して教室に設置し、断熱材を壁に施工する、断熱ワークショップを実施すると告知した。また、このセッション直後に予定している、エネルギー設備を回るツアーへの参加を呼びかけた。

2. トークセッション

千葉商科大学、自由の森学園の各発表者のトークセッションが行われた。ファシリテーターを務めた株式会社 UPDATER 沖山から両校の教員に対して「リソースも限られる中、生徒からのアイデアや発信を、学校としてどう受け止めるようにしているのか？」という質問が投げかけられ、自由の森学園理事長の鬼沢から、リソースを理由に否定をするのではなく、生徒達がやりたいことを実現できるように、可能な限りサポートをすることが、学校としての役割であると語り、千葉商科大学の手嶋もそれに同意した。

次に学生・生徒を対象に「入学前、自分の学校が環境に力を入れているかを、どう知ったのか？」という質問が投げかけられた。両校の学生・生徒ともに、入学までは環境への取り組みを認知しておらず、校内有志やサークルへの参加の中で、次第に環境教育に触れてきたことが語られ、千葉商科大学学生の田口は、自由の森学園で有志から始まった天ぷら油（BDF 燃料）回収のプロジェクトを、先進的な取り組みとして称賛した。

最後に、ファシリテーターの沖山から、自身が自由の森学園の卒業生であり、在学中の経験から、UPDATER にて学校法人との取組を実施していることを発信し、会場の学生への応援と、発表者への感謝が告げられセッションが終了した。

スペシャルレクチャー

運営者/発表者
常見陽平（千葉商科大学基盤教育機構　教授）
内容

スペシャルレクチャー「いま、日本で『将来の夢』を考えるのはなぜつらいのか? 会社と社会、人の変化を捉える」

1. なぜ現代社会は「夢」が見つかりにくいのか

現代は SNS や動画配信サービスの普及により、様々な人や情報に接する機会が増えているにもかかわらず、自分に合った夢を見つけることが非常に難しい時代となっています。その主な要因として、以下の社会構造的な変化や背景が挙げられます。

・社会変化の激しさと前提の不確実性

100 年に一度と言われるような大きな変化（パンデミック、国際情勢の緊迫、物価高、円安、資源不足など）が頻発し、夢を追いかけるための前提条件が常に変わり続けています。

・AI の発展に伴う将来不安

技術の急速な進歩により、若者の悩みは「就職できるか」から「自分の目指す仕事が AI に置き換わるのではないか」という不安へと変化しています。海外では AI 導入による業務の代替が進んでおり、大学の卒業式で AI が話題に上るとブーイングが起きるほど、職を奪われる恐怖が現実的なものとして捉えられています。

・選択肢と価値観の多様化

生き方や進路の選択肢が増え、価値観も多様化した結果、誰もが目指すような共通のモデル像が存在しなくなりました。「選択肢が多すぎるが故に決められない」という状況が発生しています。

・経済的停滞と少子化（お金と時間の若者離れ）

長期的な経済成長の停滞や急速な少子化により、社会全体の活気が失われています。若者の「車離れ」や「おしゃれ離れ」と表現される現象の背景には、若者から「時間とお金」が失われているという厳しい経済的現実が存在します。

・固定化する環境と格差・諦め感

かつてのような「一発逆転」が難しくなり、幼少期からの教育環境の差が将来に大きく影響する構造が強まったことで、社会全体に「頑張っても無駄だ」という諦め感が漂っています。

2. 話し手の半生に見る「夢」の多様な実現のかたち

52 歳である常見自身の半生を通じ、「当初思い描いた 100%の形ではなくとも、形を変えて夢を叶える生き方」を考えてみます。

・「本を書く」という夢

幼少期から文章を書くのが好きで作家を志し、大学での学びや会社員生活（15 年間）を経て、33 歳で著者デビューを果たしました。デビュー直後は本が売れず印税も入ら

ないという苦難を経験しましたが、諦めずに執筆を続け、話題作を世に送り出しました。その後、38 歳で大学院に入り直し、大学教員になるという新たなキャリアを開拓しました。

・**「変身したい・特撮に関わりたい」という夢**

幼少期に特撮ヒーローに憧れた経験から、玩具大手のバンダイに中途入社し、人事担当としてエンターテインメントビジネスの裏側に携わりました。直接ヒーローになるわけではなくとも、広い意味で「変身する」夢を実現させました。

・**「音楽に関わる」という夢**

ミュージシャンへの憧れについても、プロの道ではなくとも毎週のように演奏活動を行い、有名なライブハウスのステージに立つという形で夢と関わり続けています。

これらから、理想通りの満点ではなくても、何らかの形で関わりを持ち手応えを得る「柔軟な夢の叶え方」があることが分かります。

3. 夢を見つけ・紡ぎ出すための実践的なアプローチ

「夢が見つからない」と焦っている人に向けて、日常の中でヒントを見つけるための具体的なアプローチを提案します。

・**関心やアンテナの幅を広げる**：今まで触れたことのないメディアや本、カルチャーに興味を持ち、アンテナを高く保つことで新たな発見を得る。

・**目の前の成長や課題に没頭する**：目の前の仕事や学習に一生懸命取り組むことで視界が広がり、やりたいことが見えてくる。

・**過去の振り返りと「嫌なこと」のリストアップ**：過去に夢中になったことを探るだけでなく、「やりたくないこと・嫌なこと」を徹底的に書き出すことで、消去法的に本当にやりたいことを浮き彫りにする。

・**「できること」「期待されること」から始める**：最初から「やりたいこと」にこだわりすぎず、自分が今できることや周囲から求められていることに応えていく。

4. 結び：最大のメッセージ「叶えられる夢と出会う」

最も重要なのは、「特定の大きな夢を意地でも叶える」ことだけが正解ではないということです。

時代が複雑化する中で重要なのは、「自分にとって手が届きそうで、努力によって達成できそうな『叶えられる夢』と出会うこと」です。高い感度を持ち、目の前の一日一日を大切に積み重ねる中で、自分にフィットする夢を見出し向き合っていく姿勢こそが、これからの不確実な時代を生き抜く糧となります。

活動発表①報告

運営者/発表者
活動発表①　司会：中倉智徳 千葉商科大学エシカル学生クラブ「エシカル学生クラブの取り組み」、 湘南学園小学校「僕たちの、未来への挑戦 2025　／　4 年生 ユネスコチャレンジ Project」、和洋九段女子中学校高等学校「和洋九段の ESD～シンガポール修学旅行を通して学ぶ SDGs～」、成蹊学園①「成蹊学園の環境を活かした中高大連携と地域連携 その１：ケヤキがつなぐ、自然と食のひととき」
内容
活動発表①では、4 つの報告がなされたのち、質疑応答がおこなわれた。 最初の報告として、千葉商科大学エシカル学生クラブの「エシカル学生クラブの取り組み」では、学生代表より、フェアトレードの推進やフェアトレード商品の販売を主な活動としながら、ペットボトルキャップ回収、白馬バレーへの SDGs ツアーなどの取り組みが紹介された。大学本部が SDGs を推進用とするだけではなく、構成員、とくに学生が参加できていなければならない、そのために取り組んでいるという姿勢が印象的であった。 湘南学園小学校からは、「僕たちの、未来への挑戦 2025　／　4 年生 ユネスコチャレンジ Project」と題して、ご担当の先生より、授業実践について報告があった。理想の町を考えると、課題が出てくる。それを、じっさいに実践していく。例えば、湘南の海でのクリーン活動を、じっさいに活躍している方をゲストに招聘、学び、その後に実践するといった、課題とアクションのシェア、そしてアクションのブラッシュアップまで行う。大人がどう力を引き出すのか、向き合うのかが伝わる素晴らしい取り組みであった。 三番目に、和洋九段女子中学校高等学校「和洋九段の ESD～シンガポール修学旅行を通して学ぶ SDGs～」と題して、二名の中学 3 年生の生徒から報告があった。シンガポール修学旅行において、事前学習で自らガイドブックをつくり、その後実際に現地に行く取り組みであった。テーマは、多様性、共存、平和、発展などであった。シンガポールはさまざまな国籍、宗教などの人が暮らす国であり、多様性が学べた。現地大学生や高校生との交流を深めたり、平和と戦争について学び、日本がシンガポールを侵略した際のシロス砦や捕虜強制収容所戦争反対への思いを学ぶなど、充実した取り組みであったことがうかがえた。 成蹊学園①「成蹊学園の環境を活かした中高大連携と地域連携 その１：ケヤキがつなぐ、自然と食のひととき」では、中学校の落ち葉拾いの活動が報告された。2019 年 11 月からユネスコスクール認定されたのち、脈々と受け継がれている活動である。国際交流、環境活動（学校周辺のゴミ拾い）、他校との交流、ケヤキの落ち葉拾いなどが報告された。集めた落ち葉は焼き芋大会で使われている。そのほか、枝ワークショップや馬糞と落ち葉の灰で野菜作りなど、幅広い活動がおこなわれていることが報告された。 質疑では、それぞれに報告に対し、有意義で活発なやりとりが行われた。

活動発表①-1　ポスターセッション 14

運営者/発表者
千葉商科大学エシカル学生クラブ
内容

エシカル学生クラブの取り組み

1. 活動理念と設立目的

CUC エシカル学生クラブは、2020 年 7 月 16 日に設立された学生団体である。SDGs の 17 の目標のうち、目標 12「つくる責任、つかう責任」の達成に向けて、エシカル消費の普及を目指して活動している。

同クラブは、「環境・人・社会にやさしい選択をもっと知ってもらいたい」という思いを掲げ、「知る」「触れる」「感じる」という経験を通じて、日常生活におけるエシカルな選択を身近なものにすることを理念としている。学内外の人々とつながり、活動を通じて学びながら、エシカル消費への理解を広げることを重視している。

2. 主な活動内容

同クラブの主な活動は、フェアトレードの推進、エシカル消費に関するイベントの開催、ペットボトルキャップの回収の 3 つである。

第一に、フェアトレードの推進に取り組んでいる。フェアトレードについて考える講演会などを開催し、身近な生活との関わりから、公正な取引や消費のあり方について考える機会を提供している。

第二に、エシカル消費への理解を深めるため、展示や映画上映会、ワークショップなどのイベントを開催している。また、エシカル消費とフェアトレードを組み合わせたイベントも実施し、参加者がさまざまな形でエシカルな選択に触れられるよう工夫している。

第三に、学内でペットボトルキャップを回収し、それをワクチンに換える活動を行っている。日常生活で発生する身近な資源を活用し、具体的な社会貢献につなげる取組である。

これらの活動を通じて、エシカル消費について知識を得るだけでなく、実際に体験し、自分の日常生活における選択について考える機会を提供している。

3. 活動実績

同クラブは、フェアトレードの普及に取り組み、フェアトレード大学の更新を活動実績の一つとして挙げている。また、フェアトレードに関する認知度調査を実施し、学生や教職員、近隣住民の理解状況を調べている。

調査の全回答数は 237 人であり、フェアトレードを「知っている」と回答した割合は、学生が 76%（回答者 141 人）、教職員が 83%（回答者 87 人）、近隣住民が 56%（回答者 9 人）であった。この結果から、調査対象の学生と教職員では、フェアトレードを知っている人が比較的多いことがうかがえる。一方、近隣住民については回答者が 9 人と少ないため、結果の解釈には留意が必要である。

このような調査は、フェアトレードの認知状況を把握し、今後の普及活動を考えるため

の基礎資料となる。

4. 今後の取組

今後は、楽しみながら継続できるエシカルな暮らし方を紹介すること、より多くの人が参加できるイベントを開催すること、学内でエシカルな消費を体験する機会を提案することを目指している。

エシカル消費を特別な活動としてではなく、日々の暮らしの中で実践できる選択として広めることが、今後の重要な方向性となっている。また、イベントなどを通じて参加者との接点を増やし、学内外の人々とともにエシカル消費について学び、実践する機会を広げようとしている。

5. まとめ

CUC エシカル学生クラブは、SDGs の目標 12「つくる責任、つかう責任」の達成に向け、フェアトレードの推進、イベントの開催、ペットボトルキャップの回収など、多様な活動を展開している。

その特徴は、エシカル消費について知識を伝えるだけでなく、講演会やワークショップ、資源回収などの具体的な活動を通じて、参加者が実際に体験し、日常生活における選択を考える機会をつくっている点にある。今後も、楽しみながら続けられる暮らし方の紹介や参加しやすいイベントの開催を通じて、エシカル消費を身近なものにし、持続可能な社会の実現に貢献することを目指している。

活動発表①-2

運営者／発表者	私立湘南学園小学校　4 年生（発表：中許竜宏教諭）
内容	「僕たちの、未来への挑戦 2025」

■ 活動の概要

湘南学園小学校は、積極的に本物教育や探究学習に取り組んでいる。2024 年度は 4 年生児童の「大人は狂ってる。」という率直な問いかけから出発し、ユネスコ憲章前文の「人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」という理念のもと、「海ゴミ」「食品ロス」「平和・異文化理解」の 3 つのテーマで探究活動を展開した。本発表では、その 1 年間の歩みとアクションデー（行動・発信）の成果を紹介した。

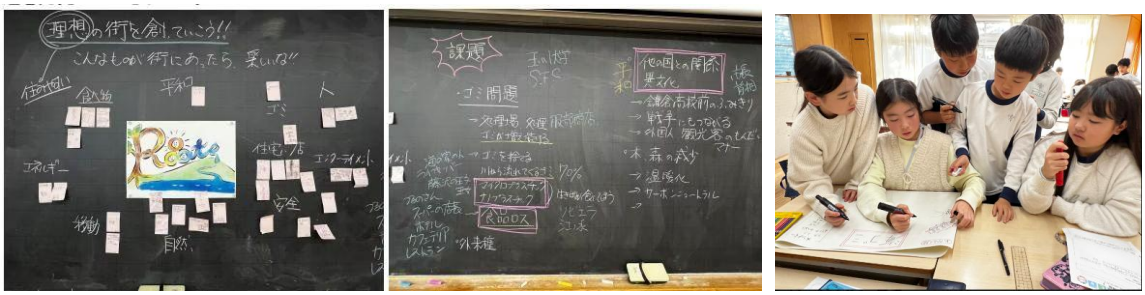
■ 単元の指導目標

・自然との関わり：自然と人間（自分）との関わりを見つめ、自然に対する自分なりの受け止めができる。

・SDGs／ESD／ユネスコ意識：持続可能な地球環境を作るために何が必要かを、ユネスコスクールを意識

しながら考える。

・地域・社会への働きかけ：様々な学習や体験活動から、地域や社会に実際に働きかけることができる。



フェーズ①：理想の街について話し合い、課題を洗い出す子どもたち

■ 主な活動（探究のプロセス）

フェーズ①	理想の街ってどんな街？　「こんな街だったら笑顔になれる」という理想と現実のギャップから、海ゴミ・食品ロス・温暖化・他国との関係・観光客のマナー・森の減少などの課題を発見。
フェーズ②	3 つの視点で学ぶ❶海ゴミ／マイクロプラスチックの写真を見て考察❷スクールランチの残飯を数値化して原因・解決策を検討❸「桃太郎」のワークショップで異なる立場から平和を考察し、玉川大学ゼミ生と Zoom 交流。
フェーズ③	課題とアクションのシェア 各グループが日本と他国の課題を比較・調査し、ポスターにまとめて共有。
フェーズ④	アクションをブラッシュアップ　製薬会社研究員（サックス・ニコラ氏）、プロサーファー（水野亜彩子氏）、イルキャンティビーチェ副社長（小坂直人氏）をゲストに迎え、保護者も交えてアクション案を対話しながら深める。
フェーズ⑤	アクションデー（行動・発信）　3 月 10 日、片瀬西浜・鵠沼海水浴場にて総勢 150 名弱で実施。地域住民・地元事業者と共にビーチクリーンやチラシ配布、飲食店への新メニュー提案を行った。

■ 活動の様子と成果

〈食品ロス削減の成果〉　スクールランチの残飯量を継続的に数値化し、ニュースタイムで全校へ「いただきます」の意味（命への感謝）を呼びかけ続けた結果、次のとおり大きく削減できた。

最初の残飯量	最終の残飯量	
2,160g 学年スクールランチ初回	300g お茶碗 1 杯分まで削減	ニュースタイムで全校へ呼びかけを継続した結果



食品ロス調査の結果を発表する子どもたち

〈アクションデー（3 月 10 日）〉　片瀬西浜・鵠沼海水浴場にて総勢 150 名弱が参加。海ゴミ＋平和チームは「5353 ゲーム」として大人 vs 子どものビーチクリーン対決（量・マイクロプラスチック量など 5 部門で競い、子どもチームが勝利）を実施。食品ロスチームは地元飲食店（イルキャンティビーチェ）に、ポスターの設置やロス食材を使った新メニュー開発を提案。あわせて江の島・新江ノ島水族館前で一般来場者へチラシ配布を行った。地元在住の音楽家・映像クリエーター・飲食店経営者など地域の方々や保護者も多数参加し、世代や立場を越えたアクションとなった。







フェーズ⑤：アクションデー当日、片瀬西浜・鵠沼海水浴場にて総勢 150 名弱で実施

■ 子どもたちの声（一部抜粋）

・本気でやれば世界だって変わるかも！

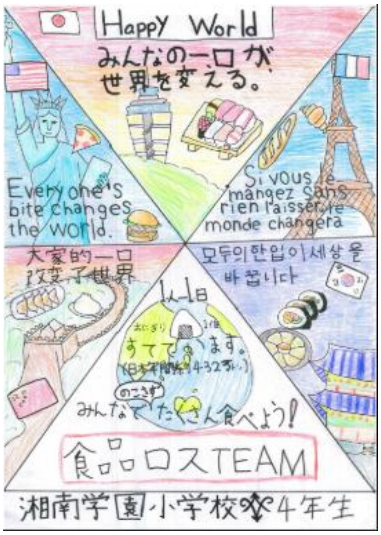
・地球が思ったよりも深刻だった。今まで何もしなかったことに責任を感じた。

・街に出て思ったけど、やっぱり世界ってすごい厳しいと感じたし、チラシを拒否されてちょっと悔しかったけど、それでも配り続ける自分がすごい！って思った。

・街に出て、いろんな人に世界の状況を伝え、「頑張ります」と言ってくれた人もいた。真剣に世界のことを考えていきたい。

■ 今後に向けて

「答えのない課題」に対して、どう取り組んでいくか。あきらめずに考え続け、「社会」と繋がっていくこと。子ども達の「つぶやき」と「行動」が、未来を変えるかもしれない、大きな可能性を、教員・保護者・地域が実感した一年となった。「HAPPY WORLD をつくる学校」という共通理解のもと、1 年生から 6 年生まで学びをつなげており、6 年生の「広島セミナー」では、被爆した方やそのご家族、活動をしている方、NHK ジャーナリストとの対話を通じて平和について考える『ピースプレナーシップ』を実施している。「平和」を願うだけでなく、自分から行動し、人と人をつなぎ、よりよい未来を、多くの人と創っていくこと。地域や社会、世界と繋がりながら、立場や世代を越えて、挑戦をし続けていこうと考えています。



活動発表①-3

運営者/発表者
和洋九段女子中学校高等学校／生徒 2 名
内容

本校では 2014 年度から、全教科で実施する PBL 型授業、総合学習・総合探究を中心とした SDGs の学び、地域、海外、官公庁、企業、教育機関など様々な連携先と繋がる「Connected School」の取り組みを進め、最終的には国内外で活躍できる女性の育成を目指している。本校のこの学びをさらに深化・発展させ、より多くの人々と対話や協働しながら学び合い・分かち合いたいと考え、2024 年 7 月にユネスコスクールへの加盟を申請した。チャレンジ期間が始まって以降、ASPUnivNet の創価大学からの指導を励みに活動を続け、2026 年 5 月にユネスコスクール正式加盟となった。

本発表は、2026 年 5 月に実施した中学 3 年シンガポール修学旅行について、「多様性・共存・平和・発展」の 4 つのテーマで事前学習、実際の旅行での学び、事後学習を行ったものを参加者全員が総括して発表したが、その校内発表会を経て選出された代表者 2 名によるものである。

「和洋九段の ESD　シンガポール修学旅行を通して学ぶ SDGs」（中学 3 年生　2 名）





①旅行の見学地・活動内容

1 日目：マーライオン公園

2 日目：JAL・国際協力銀行・ヤマト運輸訪問、マリーナバラージ、バードパラダイス

3 日目：現地校交流、B＆S（大学生と市内見学）、リバーボートクルーズ

4 日目：ヒンドゥー寺院、ムスタファセンター、シロソ砦、オーシャナリウム

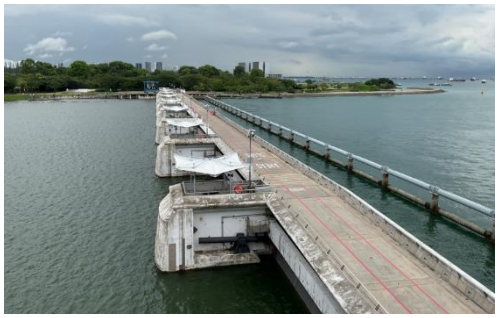
②多様性について

シンガポールには中華系、マレー系、インド系など様々な文化の人々が住んでいる。外食のときにもハラル、ノン・ハラルで食器返却場所がちがったり、電子レンジが分けられていたりした。企業での働き方でも、宗教上の休日がそれぞれで異なるため他のだれかがカバーするなどしている。日本ではあまり意識されていない民族や文化のちがいを、シンガポールではあたりまえのこととして一緒に暮らしている。私たちはここから、多様性とは一人ひとりの個性を尊重し、お互いに合い助け合えることだと考えた。

③共存

シンガポールは大都市であるにもかかわらず自然が多いのが印象的だった。人々だけでなく動物や植物も含めて自然を大切にしながら共存していると感じた。また、シンガポールは飲料水不足をダムによって解決しているが、そのダムによって自然が破壊されるのではなく、自然とのバランスが大事にされている。

現地校との交流では、和洋九段の紹介をしたり、現地校の校長先生からキリスト教についてお話しを聞いたりした。生徒同士でも、英語で話したり折り紙やジェスチャーゲームなどを行って、仲良く過ごすことができた。



④平和

シンガポールの戦争史跡の一つ「シロソ砦」を見学した。ここはもともとイギリスの軍事拠点の一つだったが、太平洋戦争のときに日本軍が侵攻・占領してからは、日本軍の捕虜強制収容所として使われていた。人形を使って当時の様子を再現した展示や、当時の砲台がそのまま残されている様子を見た。今まで知らなかったことを知り、実際に見たことで、改めて戦争について「絶対にしてはならない」と強く思った。





⑤発展

シンガポールは国土が小さく資源も少ないが、教育や医療の水準は高く、産業がとても発展しているという、日本との共通点がある。今回、シンガポールで日本の企業（JAL・国際協力銀行・ヤマト運輸）を訪問したが、それぞれシンガポールの人々の生活を支え、経済活動の発展に欠かせない仕事をしていることが分かった。

⑥まとめ

総合学習で取り組んできた SDGs の視点でシンガポールを実際に見てきて、一番強く感じたことは、文化のちがう人々がお互いを認め合っている、つまり「多様性を尊重している」ということだった。こういう社会なら 1 人ひとりが暮らしやすいと思う。他の国の人やそこで生活している人と直接話す機会もとても大事だと思った。みんなが暮らしやすい平和な社会をつくるために、私たちがどうしていけばいいのか考えるきっかけになったし、今までになかった視点で物事を見ることもできるようになった。

活動報告①-4

運営者/発表者
成蹊中高ユネスコスクール探究プロジェクト/生徒５名
内容

成蹊中学・高等学校では、成蹊学園の理念である「個性の尊重」「品性の陶冶」「勤労の実践」に基づき、有志の生徒が「ユネスコスクール探究プロジェクト」のメンバーとして多様な活動を展開している。本発表では、それらの活動のなかでも、成蹊学園のシンボルである「ケヤキ」をキーワードにした活動について紹介した。なお、発表は「成蹊学園の環境を活かした中高大連携と地域連携 その１：ケヤキがつなぐ、自然と食のひととき」と題し、成蹊大学生による「その２：キャンパスの資源を起点としたサステナブル農体験」へとつながるシリーズ発表として実施した。

■活動の目的
ユネスコスクール探究プロジェクトは、「知る」「実践する」「交流・継続・挑戦・幅を広げる」という段階的な学びを通じて、持続可能な社会づくりに主体的に関わる力を育成することを目的としている。

■主な活動内容
（１）落ち葉集め
学園内で行われる大規模な落ち葉集めは、中高校生、大学生、教職員だけでなく、地域の施設や企業など学内外のさまざまな人々が参加する恒例行事となっている。集めた落ち葉は廃棄物ではなく資源として活用され、その後の焼き芋大会などの活動へとつながっている。

（２）焼き芋大会
落ち葉集めで集めた落ち葉を活用し、教職員や大学生と協力して焼き芋大会を実施している。落ち葉集めの参加者に焼き芋を提供することで、資源循環への関心を高めるとともに、世代を超えた交流の場を創出している。

（３）ケヤキの枝を活用したワークショップ
剪定されたケヤキの枝を再利用し、クロスウィービングやクリスマスオーナメント、布を再利用したハタキづくりなどのワークショップを実施している。学園祭や地域イベントなどで開催し、多くの来場者にケヤキを資源として活用する意義や可能性を伝えている。

（４）落ち葉の灰を活用した野菜栽培
今年度初めて、成蹊大学馬術部から出る馬糞堆肥と、落ち葉を燃やしてできた灰を活用し、トマトやバジル、ルッコラなどの野菜を栽培した。大学生の協力を得ながら畑づくりから栽培管理まで取り組み、資源循環型農業を実践した。

（５）収穫物を活かした交流活動

栽培した野菜や大学生が育てた野菜を活用し、ピザ大会を実施した。収穫物を味わいながら世代を超えた交流を深めることで、自然とのつながりや資源循環の大切さを実感する活動となった。

■成果

本プロジェクトでは、成蹊学園のケヤキ並木から生まれる落ち葉や枝を有効活用し、「自然と食」をテーマとした循環型の活動を展開した。活動を通して、学園内外の多様な人々とのつながりが生まれ、環境保全や資源循環に対する理解を深めることができた。

また、ケヤキが学園のシンボルであるだけでなく、人と人、自然と食、さらには学園と地域を結び付ける存在であることを実感する成果にもつながった。

■今後の展望

ユネスコスクール探究プロジェクトでは、身近な自然資源を活用した実践的な活動を通じて、持続可能な社会の実現に向けた学びを深めている。今後も学園内外との連携を広げながら、自然・食・人をつなぐ活動を継続し、その輪をさらに発展させていきたい。







活動発表②報告

運営者/発表者
活動発表②　司会：中倉智徳 成蹊学園②「成蹊学園の環境を活かした中高大連携と地域連携 その２：キャンパスの資源を起点としたサステナブル農体験」 常磐大学高等学校「私たちとカンボジア～海外研修旅行後の成長～」 市原中央高等学校「エコキャップ運動×参加型デジタル管理システムの取り組みについて」
内容
活動発表②では、３つの報告がなされたのち、全体の質疑応答がおこなわれた。 最初に、成蹊学園②「成蹊学園の環境を活かした中高大連携と地域連携 その２：キャンパスの資源を起点としたサステナブル農体験」では、成蹊大学「お芋ほりサークル」の活動が紹介された。援農ボランティアや、サステナブル活動として、たい肥づくり、コンポストづくりなどの活動が紹介され、中高大に加え、小学校も含めた連携のとりくみがうまくまわっていることが紹介された。 次に、常磐大学高等学校（ときわだいがくこうとうがっこう）「私たちとカンボジア～海外研修旅行後の成長～」では、実際に修学旅行にいった高校３年生から報告があった。国際理解教育として、カンボジアのシェムリアップなどにいき、内戦や地雷について学んだり、同じくカンボジアにいった、成城高校との交流など、修学旅行を中心とした学びの中で大きく成長した姿をみせてくれた。 三番目に、市原中央高等学校「エコキャップ運動×参加型デジタル管理システムの取り組みについて」の報告では、これまでもエコキャップの回収を行ってきたが、それが回収後どうなるのか分からないといった課題、やりがいをどうみいだすかといった課題を解決するために、ＤＸ化し、参加型システムを構築し、実践した取り組みが紹介された。質疑応答ではこのシステムを導入したいがシステムは販売しているのかといった質問がでるほど、画期的なシステムの紹介がなされた。 ３つの報告の後、同会場で行われた活動報告①と合わせて、全体の質疑応答もおこなわれた。発表者だけでなく、参加者から積極的な質問が相次き、活発な質疑応答が行われた。

活動報告②-1

運営者/発表者
成蹊大学お芋堀りサークル/学生１名
内容

成蹊大学お芋掘りサークルは、「ボランティア」「農業」「サステナブル」を３つの柱として活動する学生団体である。本発表では、「成蹊学園の環境を活かした中高大連携と地域連携 その 2：キャンパスの資源を起点としたサステナブル農体験」と題し、学内資源を活用した循環型農業の実践や、中高生や地域との交流活動について紹介した。

■活動の目的

本サークルでは、地域農家での援農ボランティアを通じて農業について学び、その学びを学内で実践し、さらに学内や地域へ還元する「成蹊式資源循環型農業」の実現を目指している。生ごみや落ち葉など学内にある身近な資源を活用しながら、持続可能な社会づくりに貢献することを目的として活動している。

■主な活動内容

（１）援農ボランティア

近隣地域の農園で継続的に援農ボランティアを行い、地域の農家から農業技術や持続可能な農業について学んでいる。また、長野県飯綱町での活動では、みみずを活用した生ごみの堆肥化について学び、その知見を学内での活動に生かしている。

（２）資源循環型の堆肥づくり

学食から出る生ごみやケヤキの落ち葉を活用し、堆肥づくりに取り組んでいる。さらに、スターバックスから提供されたコーヒーかすも活用し、資源を循環させる仕組みづくりを進めている。

（３）学内での農業実践

学内の畑で、さつまいもやトマト、ナス、落花生などさまざまな作物を栽培している。遊休地の開墾や土づくりから取り組み、学生主体で持続可能な農業を実践している。

（４）中高生との交流活動

中高生とともに腐葉土づくりの手伝いや畑の見学、ピザづくりなどを行い、世代を超えた学び合いを実践している。また、落ち葉集めや焼き芋大会にも参加し、学内での交流を深めている。

（５）地域交流

地域食堂や地域イベントにおいて、収穫したさつまいもを活用した焼き芋や大学芋を提供した。農業体験を通じて地域住民との交流を図るとともに、食や環境に関する学びを発信している。

■成果

生ごみやケヤキの落ち葉、馬術部の馬糞堆肥など、成蹊学園ならではの資源を活用し、作物の栽培から学内・地域への還元までを循環的に行う「成蹊式資源循環型農業」の実践を紹介した。こうした取り組みは、学生が主体となって課題を発見し、解決に向けて行動する課題解決型学習（PBL）の実践の場となっている。

また、大学生が中高生や地域住民との架け橋となり、学園内外の多様な人々との協働を通して、世代を超えた学びや交流が生まれている。地域から学んだ知識や技術を学内で実践し、その成果を再び地域へ還元する好循環が形成されていることも、本活動の大きな成果である。

■今後の展望

今後の大きな目標として、「成蹊式資源循環型農業」のモデル化を掲げている。成蹊学園ならではの豊かな自然環境やワンキャンパスの特色を生かしながら、学内資源を活用した農業実践と地域連携をさらに発展させていきたい。

また、「教わる」だけでなく「一緒に挑戦する」関係づくりを重視し、中高生や地域の方々と連携したコンポストづくりや野菜栽培、食育活動などの共同実践へと発展させることで、世代を超えた学びの場を広げていく。こうした取り組みを通じて、学園と地域をつなぐ連携の輪をさらに広げていきたい。





活動発表②-2

運営者/発表者
常磐大学高等学校
内容

私たちとカンボジア―海外研修旅行後の成長と ESD の実践

1. カンボジア異文化理解研修旅行での学び

茨城県水戸市にある常磐大学高等学校は、国際理解教育や、地域探究などを通じた ESD（持続可能な開発のための教育）に力を入れている。同校では、カンボジアのシェムリアップを訪れる異文化理解研修旅行を実施し、現地でのさまざまな活動を通じて、歴史や教育、国際協力について学んでいる。

研修旅行では、カンボジアの歴史的背景として、内戦による地雷の問題や、ポル・ポト政権下での大量虐殺について学んだ。こうした歴史の影響により、教育を受ける機会を失った世代が存在することも知った。貧困の連鎖を断ち切り、持続可能な社会を実現するためには、教育を継続できる環境を整えることが重要であると認識した。

また、国際協力についても理解を深めた。カンボジアでは、コマツなどの企業が活動するほか、上智大学がアンコール・ワットの修復や人材育成に取り組んでいる。さらに、日本の協力によって建設された橋も存在する。こうした事例を通じて、生徒たちは、国際支援は一方的に援助するものではなく、相手国の立場に立ち、現地の人々とともに社会を築いていくことが重要だと学んだ。支援とは、支援する側の自己満足ではなく、現地の人々の尊厳を守る行動であるという認識も得られた。

日本とカンボジアの双方にとって持続可能な社会を実現するためには、教育や技術の支援、人材育成、留学などを通じて人材を育てることが重要である。日本の技術力を活用するとともに、育成した人材がカンボジアで技術を継承していく仕組みをつくることが、長期的な発展につながると考えられる。

2. カンボジアの女性支援―パバナサラの取組

生徒たちは、カンボジアの女性支援についても学んだ。「パバナサラ」は、カンボジアの女性と日本人女性が協力して運営する工房であり、ウォーターヒヤシンスという植物を編んで、かごやバッグなどを製作している。

農村部では、子育て中の女性が大都市へ出稼ぎに行くことが難しく、就労の機会が限られる場合がある。パバナサラは、そうした女性たちが自宅で取り組める仕事を提供することで、女性の就労を支援している。また、カンボジアの素材を使い、現地の女性が製作した商品を土産物として販売することで、地域の資源や技術を活用した経済活動を実現している。

この取組は、単に商品を販売するだけでなく、地域の女性が働く機会を確保し、生活を支える仕組みをつくるという点で、持続可能な社会づくりにつながっている。

3. 水戸まちなかフェスティバルでの実践

生徒たちは、カンボジアでの学びを日本の地域社会に還元するため、水戸まちなかフェ

スティバルに参加した。2025 年 5 月と 2026 年 5 月に実施した活動では、ウォーターヒヤシンスを使ったキーホルダーづくりや、カンボジアの商品販売に取り組んだ。

その目的は、カンボジアの製品や現地の活動を地域の人々に紹介するとともに、研修旅行で学んだことを自分たちの街に還元することである。海外で得た知識や経験を地域のイベントで発信することにより、生徒たちは自らの学びを深めると同時に、市民がカンボジアについて知る機会をつくった。

この活動は、海外研修を一度きりの経験で終わらせず、地域社会とのつながりの中で具体的な行動へと発展させた実践である。

4. 成城高等学校との交流

東京都新宿区にある成城高等学校とは、同じくカンボジアを訪れた生徒同士が交流し、現地での経験や学びを共有している。2024 年度には水戸、2025 年度には新宿で交流会を開催した。

交流では、「カンボジアの GDP を上げるにはどうすればよいか」というテーマについて話し合い、インターネットなどを活用して調査した内容をスライドにまとめ、発表した。意見としては、交通網の活性化、カンボジア発の既存ブランドの知名度向上、新産業の発展などが挙げられた。

こうした活動を通じて、生徒たちは異なる学校の生徒と意見交換を行い、カンボジアの持続的な発展について多角的に考える機会を得た。

5. 研修旅行後の成長と ESD の意義

実際にカンボジアを訪れたことで、生徒たちは、都市部と農村部では生活環境に違いがあることや、教育が十分に行き届いていない地域があることを実感した。一方で、歴史的な背景や地域間の格差がある中でも、現地の人々が笑顔で暮らしている姿にも触れた。こうした経験から、現地を実際に訪れ、自分の目で見なければ理解できないことがあると認識した。

研修後には、他校との交流を通じて現地での経験を共有し、学びを深めた。また、地域のイベントに参加し、カンボジアでの活動や商品を市民に紹介することで、海外での学びを自分たちの街に還元した。発表では、こうした取組を「小さなトランスフォーメーション」の実践として捉えている。

一連の活動を通じて、生徒たちは、人々のウェルビーイング（幸福や良好な生活状態）の実現には、人と人とのつながりや調和が大切であると考えるようになった。そして、特別な立場にある人だけでなく、普通の高校生であっても、人とのつながりを広げ、社会をよりよくするための行動を起こせることを実感した。

この取組は、海外で得た知識や経験を、他校との交流や地域社会での活動へとつなげることで、学びを具体的な社会参加へと発展させた実践である。カンボジアへの理解を深めるだけでなく、自分たちにできることを考え、行動する過程そのものが、持続可能な社会の創り手を育てる ESD の実践となっている。

活動発表②-3

運営者/発表者
市原中央高等学校　1 年　濱上未来音 / 藤原千遥
内容

1. はじめに



エコキャップ回収活動に QR コードやスマートフォンを活用した「参加型デジタル管理システム」について報告する。本システムは、従来のエコキャップ運動において参加者が感じにくかった「貢献の実感」を高め、活動を継続しやすくすることを目的として考案されたものである。エコキャップ運動は、ペットボトルキャップを回収し、リサイクル資源として活用することで、環境保護や社会貢献につなげる活動である。学校や家庭など身近な場所で誰でも参加できる点が特徴であり、SDGs への関心を高める入り口としても有効である。しかし、回収されたキャップがその後どこへ運ばれ、どのようにリサイクルされ、最終的にどのような支援につながっているのかは見えにくい。そのため、参加者はキャップを投入した直後の達成感しか得られず、継続的な参加意欲を保ちにくいという課題がある。

2. 課題と目的



従来のエコキャップ回収活動では、参加者にとって活動の成果が分かりにくいことが大きな問題である。回収後の流れやリサイクル後の資源利用の状況が不透明であるため、自分の小さな行動が社会にどのように役立っているのかを実感しにくい。また、初めて参加する人にとっては、活動の目的や効果が十分に伝わらず、継続的な取り組みにつながりにくい面もある。そこで本システムでは、参加者自身がエコキャップの投入数を入力し、そのデータを記録・管理できる仕組みを導入する。単にキャップを回収するだけでなく、参加者が自らデータを入力する「参加型」の形式にすることで、活動への関与度を高めることを目指している。個人の小さな行動が数値として可視化されることで、社会貢献への手応えややりがいを感じやすくなる。また、本システムは、身近なエコキャップ回収をきっかけに、環境問題や社会課題への関心を広げることも目的としている。日常生活の中で行う小さな行動が、SDGs の目標 12「つくる責任 つかう責任」などに関わっていることを理解することで、参加者の意識変化を促すことができる。さらに、リサイクル資源が途上国の医療支援やポリオワクチンの提供などに役立つ可能性を示すことで、貧困や健康問題への理解を深めるきっかけにもなる。

3. システムの仕組み



本システムでは、家庭や校内に設置されたエコキャップ回収ボックスに QR コードを貼り付ける。参加者は、スマートフォンのカメラアプリや QR コードリーダーでそのコードを読み取るだけで、専用の Web ページにアクセスできる。専門的な知識や特別な操作は必要なく、誰でも簡単に利用できる点が特徴である。Web ページを開くと、参加者は自分が投入したエコキャップの個数を入力する。入力はタッチパネルで数字を入れるだけの簡単な方法とし、重さの測定や細かな手続きは不要である。入力されたデータは自動的にサーバに送信され、個人の累計データや全体の総回収量として記録・保存される。これにより、自分がどれだけ活動に貢献したのか、また学校全体としてどの程度の成果が出ているのかを確認できるようになる。この仕組みによって、エコキャップ回収は「入れて終わり」の活動ではなく、成果を確認しながら参加できる活動へと変化する。参加者が自ら記録に関わることで、活動への意識が高まり、継続的な参加にもつながると考えられる。

4. 期待される効果と目指す未来

本システムの導入により、参加者は自分の行動が社会に役立っていることをより具体的に実感できるようになる。投入したエコキャップの数が記録され、累計として見える化されることで、小さな行動の積み重ねが大きな成果につながることを理解しやすくなる。また、校内での身近な活動が、環境保護や医療支援といった世界規模の課題とつながっていることを示すことで、日常生活と社会課題の関係を体感できる。エコキャップを「ごみ」として捨てるのではなく、資源として活用する意識を持つことは、持続可能な社会を考える第一歩となる。今後は、回収量だけでなく、リサイクル後の活用状況や支援先とのつながりをより分かりやすく示す工夫も重要である。参加者が活動の成果を実感できる情報を継続的に共有することで、エコキャップ運動は一時的な取り組みではなく、日常生活に根付いた持続可能な活動へと発展していくと期待される。



分科会①

運営者/発表者
千葉県高等学校教育研究会 ESD 部会　引率教員 6 名/ スタディツアー参加生徒２０名
内容
千葉県高等学校教育研究会の 2017 年からの歩みと日韓ユネスコスクール協働・共同スタディツアー（公益財団法人日韓文化交流基金、公益社団法人ユネスコ協会助成事業）について、ツアーに参加する生徒たちによる発表を行った。 ・ESD 部会とは　千葉県下のユネスコスクールを中心に、学校の違いを超えてつながるネットワークで、千葉県全体としてユネスコの精神と活動を豊かにしてくために設立された組織である。夏の生徒研修会、秋の教員研修会、年度末の成果発表会を千葉大学教育学部と連携して行っている。現在千葉県下の県立高校、市立高校、特別支援学校、私立学校の２４校が加盟している。 ESD 部会 HP　https://esdchiba.crayonsite.com/ ・「高校生による日韓ユネスコスクール協働・共同スタディツアー」は加盟校の生徒、教員が一緒に協働して、共同で韓国文化や ESD 活動の紹介、披露する歌の練習など渡韓準備をはじめ、学ぶ場である。さらに、その学びを活かし、韓国のユネスコスクールとの交流を通して、日韓の高校生が互いに理解を深め、尊重しあう場となる。このツアーでは自校の紹介や ESD 活動についての学び合い、日本の伝統工芸として日本茜染つまみ飾りを紹介する。日本茜染めのつまみ飾りは以前夏の生徒研修会で成田西陵高校から学ぶとともに、韓国の生徒とともに実施できるよう、今回の事前学習で参加生徒が体験している。このツアーは、参加する高校生が自ら考え、その学びをもって行動し、さらに今後の活動に生かす学び合いの機会とする。 　ツアー日程紹介、学びの内容、生徒たちの自己紹介（がんばりたいこと、楽しみにしていること） 　学びの内容 民俗村見学、漢白高校授業参加（英語、音楽、体育）SDGs ポスターセッション、日本茜染め体験、韓国文化体験、SDG s テーマ学習、論山フォール度ワーク、「日韓共同平和宣言文」の公表 　生徒たちの自己紹介 自分たちが主体的に考え、行動することが求められているので積極的に動きたい。韓国でしかできない体験をして、文化への理解を深めたい。事前学習した日本茜についての説明をきちんと教えられるように頑張りたい。韓国語や英語を使ってのコミュニケーションをがんばりたい。韓国の友人を作りたい。給食も楽しみ。韓国の授業に参加できるのが楽しみ。たくさん韓国語を話したい。自分の意見をもって、しっかり意見を交換したい。一緒に韓国に行く日本の友達とも韓国にいる間は韓国語で会話したい。日本のことについて韓国の高校生にたくさん教えてあげたい。高校生との交流が楽しみ。初韓国なので全部が楽しみです！買い物、おいしいものを食べて、写真もたくさん撮りたい。





・発表の後は分科会参加者から質問や激励をうけ、それに答えた。
「どうして韓国なのか、このツアーに参加しようと思ったのか」
韓国の文化である音楽が好きで、もっと現地でしかできない体験をしたいと思って参加した。
韓国のアイドルや K-POP が好きで、現地の高校生と交流できるので参加した。
「韓国語は習っているのか」
今まで習ったことがなかったが、韓国語講座があるので参加している。
学校で授業がある。ある程度話せるのでよりネイティブに近づきたい。
「韓国の歴史をどれくらい知っているのか」
事前学習で韓国語の韓服体験をしたり、文化を学んだりしてきたが現地でも学んでいきたい。
過去の歴史的な背景は変えることができないが、自分の意見をもって意見交換をすることが大切で、そうすれば乗り越えられることができると思う。
「韓国が嫌いだという日本の人もいるが、そういう人に対してどのようにこのスタディツアーを伝えるか」
韓国の良さを伝えたい。いいところを知ったら好きになると思う。歴史的な関係などもあるが、これからのことを考えて互いの良さを知って、尊重出来たらいいと思う。
「この経験をそのあとどのように自分の生活に活かしていけるか、活かしていきたいと考えているか」
今回は韓国に行くが、そのあとは、もっと世界が広がると思うので、ぜひもっとほかの国などを含め、広い世界を見たいと思う。
今回の経験は将来どういうことをしたいのかなども考える機会になると思うので、進路を決める選択の一つにしたい。

分科会②

運営者/発表者
千葉商科大学　奥寺葵ゼミ
内容

奥寺ゼミの分科会では、二つの研究発表が実施された。

【研究テーマ①】就職活動の早期化は学生・企業双方にとって望ましいのか

1. 就職活動の早期化の実態と背景

政府による就職・採用活動の要請では、広報活動（会社説明会など）の開始が大学 3 年の 3 月 1 日、選考（面接・内々定）の開始が 4 年の 6 月 1 日と設定されている。しかし現実には、大学 3 年の春期（4〜6 月）からインターンシップ活動が開始し、夏期（7〜9 月）にピークを迎えるなど、実質的な活動時期の大幅な前倒しが生じている。その結果、大学 3 年の 3 月時点で約半数、4 月時点で約 7 割の学生が内々定を獲得しており、従来の基本スケジュールから約 3 ヶ月早期化している状況である。また、低学年（1・2 年生）からのキャリア意識の高まりにより、早期から活動を開始する層も増加している。

2. 学生および企業に生じている弊害

就活の早期化・長期化は、一見すると「早期の内定による安心感」や「優秀層の早期確保」という利点があるように思われるが、実際には双方に深刻なデメリットをもたらしている。

学生側の弊害：3 年の夏から 4 年の 6 月近くまで約 1 年間拘束されることで、学業・研究、留学、サークル、アルバイトといった大学生活でしか得られない経験や成長の機会が著しく損なわれている。調査では約 9 割の学生が「就活以外のことにもっと時間を使いたかった」と感じており、選考に伴う交通費や宿泊費などの経済的負担や心理的疲弊も深刻である。

企業側の弊害：早期内定から入社までの期間が長引くことで内定辞退率が上昇（2025 年卒で 65.6%）しており、辞退者の補填や引き留め、長期にわたる採用対応によって採用コストや人員負担が増加している。調査では企業側の 6 割以上が「悪影響があった」と回答している。

3. 構造的問題と今後の方向性

なぜ早期化が止まらないのか、その本質は「他者に後れをとりたくない」という学生と「他社に優秀な人材を取られたくない」という企業の個々の防衛行動（個人最適）の連鎖にある。これはゲーム理論における「囚人のジレンマ」であり、全員が自己防衛に走った結果、全体として全員が損をする不満足な状況を生み出している。

この問題は個人の努力だけでは解決できず、就職活動の早期化は「学生・企業双方にとって望ましくない」と結論づけられる。今後に向けては、採用ルールの厳格な運用、インターンシップのあり方の見直し、学生が学業や自己成長に専念できる環境づくりなど、社会的な仕組みの再構築と信頼関係の形成が必要である。

【研究テーマ②】「働きやすさ」と「働きがい」どちらを重視するのか

1. 働く価値観の変化と現状

かつて（2012 年など）の新入社員は、「自分の能力が生かせる」「仕事が面白い」といった「働きがい（やりがい)」を重視して会社を選んでいた。しかし近年では「給与水準」「福利厚生」「安定性」といった「働きやすさ（ワークライフバランス)」を重視する傾向が強まっている。千葉商科大学生 102 人を対象としたアンケート調査でも、7 割以上の学生が「働きやすさ」を重視すると回答しており、安心・安定やプライベートとの両立を求める意識が明確に示されている。

2. 「働きやすさ」推進の功罪と「ゆるブラック企業」問題

長時間労働の是正や柔軟な働き方（リモートワークや有休取得など）を目的とした「働きやすさ」の整備は、過労やストレスの軽減、離職防止といった「マイナスを減らす」観点で大きな成果を上げた。

しかし、働きやすさばかりを追求した結果、若手に責任ある仕事を任せず成長機会を提供しない「ゆるブラック企業」と呼ばれる状態が生じるようになった。働きやすさは仕事の「土台」であり、働きがいは「意欲や成長を生み出す要素」である。そのため、働きやすさを整えるだけでは挑戦や成長実感といったプラスの成果は生まれず、かえって成長機会の不足から離職に至るケースも発生している。

3. 「両立」を実現する企業事例と課題の本質

調査事例から、「働きやすさ」と「働きがい」はトレードオフではなく両立可能であることが示されている。

・LINE ヤフー：フレックス等の環境（働きやすさ）を基盤に、上司が成長支援を行う「攻めの 1on1」を実施（働きがい)。

・KDDI：テレワークや育児支援の体制を整えつつ、部署を超えて新しい業務に挑戦できる「社内プチ副業」を導入。

・メルカリ：柔軟な勤務制度に加え、社員同士で感謝や貢献を評価し合う「めるチップ」で貢献を可視化。

日本における問題の本質は「どちらかが不足していること」ではなく、「両方を実現できる仕組みが社会全体に十分に広がっていないこと」にある。

4. 今後の施策提案

双方が調和した社会を実現するために、以下の提案がなされている。

・選べる・選びやすくする仕組み：勤務時間・場所・キャリアコース等の選択肢を企業が増やし、比較表や適性診断で求職者が選びやすくする。

・評価軸のアップデート：従来の休日数や残業時間に加え、「社内公募利用率」や「研修参加率」「成長実感度」など挑戦できる環境を評価指標に加える。

・「働きがい認証制度」の創出：子育てや健康に関する既存の認証制度に加え、挑戦やキャリア自律、成長実感を評価する新たな認証制度を設ける。

「働きやすい会社」で満足するのではなく、「働きやすく、働きがいもある会社」を当たり前にしていくことが、持続可能な社会につながるのである。

分科会③

運営者/発表者
玉川大学教育学部、大妻中野中学校・高等学校、東京都立山崎高等学校
内容

玉川・大妻・山崎合同分科会

「『食べること』から見えてくる持続可能な未来　ー　ユースによる SDGs 授業提案」

【参加生徒・学生】

玉川大学教育学部 5 名、大妻中野中学校・高等学校 13 名、東京都立山崎高等学校 18 名

【概要】

玉川大学教育学部、大妻中野中学校・高等学校、東京都立山崎高等学校はこれまで「第 1 回ユネスコスクール関東ブロック大会」(2019 年）から毎年、高大連携の合同分科会を開催してきた。異学校種間の交流と協同により持続可能な社会づくりに向けた探究活動の新たな視点が醸成され、社会課題への気づきが深まることが合同分科会の狙いである。今回の分科会では人間の生命活動の基本である「食べること」に焦点を当て、SDGs の異なる目標に対応した 5 つのテーマを扱う高大連携合同の 5 チームを結成した（それぞれのチームに 3 校の生徒・学生が入っていた)。それぞれのチームは担当するテーマについて、小学生を対象にした探究課題学習の授業案（1 時限）を共同作成した。

【各グループのテーマ】

5 つのチームのテーマと対応する SDGs 目標は以下の通りであった：

グループ 1「おやつ」(SDG 3)

課題：おやつの重要性（メリット）とリスク（デメリット）は何か？

グループ 2「給食」（SDG 4）

課題：理想の給食とはどのようなものか？

グループ 3「ジェンダーと食」（SDG 5）

課題：パフェはどうして女の子のものなのか？ 食は性別によって規定されるのか？

グループ 4「知育菓子」（SDG 9）

課題：知育菓子は実際にはどのような影響を身体や頭脳に与えているのか？

グループ 5「食品ロスと飢餓」（SDG 10 & 12）

課題： 余剰食品をどのように飢餓に悩む国に届けたらいいのか？

【各グループの授業案】

分科会の後半では、5チームそれぞれが所与のテーマについて作成した授業案を全体に発表し、それについて会場全体で議論が行われた。

グループ 1（SDG 3）では小学校高学年を対象にした「おやつと健康」というテーマの授業案を作成した。授業活動テーマとして「おやつは本当に悪者？」という問を掲げ、おやつの持つさまざまな機能（娯楽、社交、栄養補給 etc.）をふまえながら、おやつは健康に良いか悪いかについて 2 つの立場に分かれてディベートを行なうという「おやつ裁判」を実施することで、おやつのもつ多面性への理解につなげるという授業の創出を試みた。

グループ２（SDG 4）では小学校中学年を対象に給食をテーマにした授業案を作成した。授業活動テーマとして「理想の給食の献立を考えよう！」という課題を設定し、栄養、費用、季節の食材の活用、アレルギー配慮などさまざまな観点を考慮した給食献立を考えてもらい、それをみんなで見直して「理想の給食」を創るという作業を想定した。給食献立は健康と栄養バランス、味覚、費用などさまざまな配慮の上に提供されていることへの理解を深めることが学習成果として目指された。

グループ３（SDG 5）では小学校４・５年生を対象に、「ジェンダーを理解しよう！」という授業活動テーマで授業案を作成した。１）男の子／女の子の食べ物というイメージはどこから来るか、２）お代わりをすることとジェンダーは関係しているか、３）家庭でお母さんとお父さんのどちらがご飯を作るか、の３つの観点についてグループワークを行い、ジェンダーと食に関する固定観念への気づきと相対化する視点の獲得を目指した。

グループ４（SDG 9）では小学校３・４年生を対象に「知育菓子」という授業活動テーマで授業案を作成した。いくつかの知育菓子について説明と紹介を行い、実際に知育菓子の製作をすることを通じて、食と科学の関係についての理解を深めてもらうことを目的とした。また、さまざまな化学反応を伴うレシピを体験することで、食と科学のコラボを日常生活に導入する楽しさを知ってもらうことを目指した。

グループ５（SDG 10 & 12）では小学校６年生を対象に、「給食とフードロス」という授業活動テーマで授業案を作成した。日本と海外のフードロスについて調べ学習を行い、国内外のフードロス改善策を紹介した上で、自分たちのフードロス改善策を考えてもらいグループごとに発表するという活動を想定した。フードロスの現状と対策に接することを通じ給食や家庭の食について自分ができることを考えてもらうことを狙いとした。

【成果と課題】

各チームが作成した授業案を会場参加者の前で発表することを通じて、生徒・学生は「食」という日常的な事象がじつは非常に多様な社会的テーマや問題と関わり合っていることへの気づきを獲得することができた。また各チームの発表後、会場参加者の方々を交えて授業評価と振り返りを行うことで、SDGs がめざす持続可能な未来に向けて「食の平和・福祉」を保障するために私たちに何ができるかについての洞察を深めることができた。課題としては、ここで作成した授業案を実際に小学校の総合学習で実施する機会をどう作っていくかが問われた。また授業案で提唱されたアイデアを分科会の作業課題として終わらせるのではなく、実際の行動変容にどう繋げていけるかが課題として残された。





分科会④

運営者/発表者
創価大学ユネスコクラブ
内容

分科会④は、創価大学ユネスコクラブの学生 5 名が「私たちの食の選択：選んで考える！食生活と持続可能な未来」と題して実施した。本分科会は、社会における食料資源の有限性や、深刻化する環境問題と食の関係についての理解を深めることを出発点としている。私たちが日々無意識に行っている消費選択は、単なる個人の嗜好に留まらず、グローバルに、また未来に渡って影響を及ぼしているということの理解を促し、人・社会・地域・環境に配慮した消費行動であるエシカル消費の視点を広げることを目的とした。

この分科会ではまず、環境への配慮と食の満足度のバランスを考えながら選択を重ねるゲームを行った。参加者は 4 チームに分かれ、それぞれが 1 家族として、食べたい料理と食材を選ぶ作業を 8 ターン実施。食材は、環境負荷が大きいが安価な A 食材、標準的な B 食材、環境に配慮しているが高価な C 食材の 3 段階に分かれている。そこから 1 つを選択し、スーパーを模したコーナーで購入しながら、体験的に食の選択について考えてもらう仕組みである。



学生による説明の様子(ゲーム中)

1 ターン経過するごとに、参加者の食選択に合わせてイベントが発生する。「マグロの旬」や「肉(29)の日」には、価格が下がったり満足度が上がったりするといった恩恵がある一方、マグロが多く消費されると過去の乱獲や規制の歴史を模した「マグロの乱獲」が宣言されて価格が上昇する。また、「地球環境の悪化」といったイベントも発生し、環境変化の影響を受けた食材の価格が引き上げられた。各食材が、実際に生産過程で排出する CO2 の量や環境負荷を考慮し、食材の中でも牛肉を選択すると環境負荷が蓄積しやすく、カカオは環境悪化時に特に値上がりする設定とした。最終的には、残金や満足度に加え、バランスの良い食事や、環境に配慮された C 食材の購入数などに応じてボーナスを加算し、総合スコアで勝敗を競った。


ゲーム中の様子

ゲーム後には、ユネスコクラブの学生らが、作中の価格変動と現実社会との関連性について解説した。まず、牛肉生産において、多量の温室効果ガスが排出される事実を共有した。特に、広大な放牧地や飼料畑の確保に伴う森林破壊といった「土地利用変化」の経路からの排出量は多量であり、農林畜産物に起因する森林破壊の約 1/3 以上を牛肉生産が占めている事実や、多量の水を消費するバーチャルウォーターの課題を提示した。次に

「カカオショック」を取り上げ、気候変動や害虫被害によって西アフリカの栽培適地が急減し、2年で価格が約5倍に跳ね上がった現状や、カカオ農家の厳しい経済状況を紹介した。また、乱獲により資源量が減り、厳格な漁獲枠管理や届出義務が課されるようになったクロマグロの現状や、海のエコラベルの意義、さらに過去に人間による乱獲と生息地破壊によってわずか数十年で絶滅に追い込まれたリョコウバトの事例などを紹介した。



学生による説明の様子(ゲーム後)

さらに、ゲームを通じた学習のまとめとして、現代の食生活に潜む本質的な課題と食育の必要性について説明した。私たちが日常で手にする安価な商品の裏側には、環境負荷や生産者への経済的しわ寄せといった「歪み」が存在している。一時の「安さ」や「美味しさ」のみを追求する消費行動を続けていれば、持続可能性の基盤である生態系や社会の構造が崩壊してしまう。

この問題に対し、消費システム自体の変革が重要であると考える。そして、消費者である私たちから変えていけることとして提示したのは、一人ひとりが持つ食への影響力を自覚することの重要性である。「この食材は未来にも残っているだろうか」「この商品が店に並ぶまでにはどのようなストーリーや負荷があるのだろうか」と、目の前の食材の背景に想像力を働かせ、事実を知ることが求められる。重要なのは、特定の食材を完全に排除する極端な制限よりも、安さや美味しさと環境負荷・持続可能性を総合的に判断し、中長期的な視点で日常の中に無理なくサステナブルな選択を取り入れていく姿勢である。

社会全体の消費のパラダイムを変えていくには、こうした個人の意識変革と判断の積み重ねがひとつの大きな力となる。未来の食を守るためには、単に知識を付けるだけでなく、一人ひとりが自分自身と地球環境の双方に負担をかけない判断を行えるような誰も取り残さない持続可能な食育の推進が不可欠であることを訴えた。参加者にとっても、安価な食材とサステナブルな食材を日常の中で無理なくバランス良く取り入れていく大切さを学ぶことのできる機会となったと思われる。


ユネスコクラブの学生

今後は、本分科会で得られた知見をもとに、教材をさらにブラッシュアップし、大学内で実施するなど活動を進めていきたい。今回の分科会を通して深めた持続可能な食選択に関する知識や視点をより多くの人に伝え、若者世代から食のパラダイムシフトを起こすべく、未来の食を守る啓発活動を継続して推進していきたい。

ポスターセッション３

運営者/発表者
八千代市立萱田中学校/生徒２名
内容

1. 発表の概要



本校では、校訓・学校目標につながる「萱魂（かやだましい）４つの心得」(「全力」「積極性」「協力」「コミュニケーション」）を学びの根幹に据え、学校から地域、そして世界へと広がる持続可能な学びと実践（ESD）に取り組んでいる。

令和８年８月４日に千葉商科大学で開催された「第７回 ユネスコスクール関東ブロック大会」において、本校の２年生代表生徒２名がポスター発表を行った。全校で取り組む「4つの心得の木」をはじめ、地域・世界とつながる３つの実践（「ひまわりプロジェクト」「竹灯籠づくり」「キューバプレゼンテーション」）について報告し、他校や大会関係者との交流を深めた。





2. 実践内容の詳細

（1）基礎となる「萱魂（かやだましい）４つの心得」の取り組み

昇降口に掲示されている「4つの心得の木」には、生徒一人一人が日々の学校生活の中で実践した「全力」「積極性」「協力」「コミュニケーション」に関する具体的なエピソード（壮行会での全力の応援、自発的な清掃活動、給食や調理実習での協働など）が花びらや葉の形で共有されている。自他の良い行動を可視化・共有することで、生徒全員が主体的に学校生活を向上させる意識を高め合っている。





（2）地域と復興を結ぶ「ひまわりプロジェクト」

東日本大震災からの復興支援を目的として、八千代ユネスコ協会より寄贈されたひまわりの種を、保護者で構成されているフラワーサポーターやボランティア部、美術部が協力して栽培した。収穫した種は福島に送り、ひまわり油やバスの燃料（バイオディーゼル燃料）として活用され、地域や被災地への継続的な貢献につながっている。太陽に向かって咲く黄色い花が学校全体に前向きな活気を与えている。





（3） 地域協働と街の活性化「竹灯籠（たけとうろう）づくり」

３年生の技術科の授業において、地域NPO法人「八千代植栽サポーター」等の地域の方々（代表：北村節子 氏ら）を講師に招き、毎年3年生全員が一人一作品の竹灯籠製作を行い、八千代中央駅に展示している。このプロジェクトは、住民からの「夜の八千代中央駅前を明るくしたい」という要望を地域NPO法人が受けて、開始された取り組みであり、毎年冬季には完成した約 190 個の竹灯籠を駅前に展示・点灯している。発表を行った２年生自身も、次年度の製作に向け、地域の方々と協力しながら前年以上の輝きを目指して取り組む意欲を高めている。



（4）国際理解教育「キューバプレゼンテーション」

本校の JICA 研修生（キューバ出身）との交流を通じた取り組みを行っている。1 年生の「総合的な学習の時間」において、JICA 研修生がキューバの文化、生活、価値観の違いについて、プレゼンテーションを実施した。生徒は異文化への深い理解を得るとともに、多様な視点から物事を捉える大切さ、より魅力的に見せるための伝え方を学び、自身の探究活動と、その発表へとつなげている。

3. 当日の発表の様子および会場からの反響

（1）来場者からの主な質問と関心

当日のポスターセッションでは、他校の教員やユネスコスクール関係者から以下のような具体的な質問や関心が寄せられた。

ア　活動の発足経緯について：「ひまわりプロジェクトや竹灯籠づくりは、どのようなきっかけで始まったのか。」

イ　自校への導入・再現性について：「自校でも同様の取り組みを行いたいが、どのような手順・地域連携を行えば実施できるのか。」

ウ　成果物の具体的な活用法について：「収穫したひまわりの種は、具体的にどのような用途（油やバイオ燃料等）に使われているのか。」

（2）発表者（生徒）の変容と成果

発表を担当した 2 名の生徒は、最初は緊張した面持ちであったものの、複数回のセッションを重ねるうちに表現力が目に見えて向上した。 後半では、ポスターの要点を的確に押さえた説明ができるようになり、来場者からの質問に対しても自信をもって受け答えする姿が見られた。学校の代表として自校の実践を外部へ発信する経験を通じ、主体性とコミュニケーション能力の大幅な成長がうかがえた。

4. まとめと今後の展望

身近な学校生活（4 つの心得）から出発し、地域（ひまわり・竹灯籠）、世界（キューバ交流）へと視野を広げてきた本校の ESD 実践は、生徒自身が地域社会や国際社会の一員であることを自覚する貴重な機会となっている。

今後は、今回の関東ブロック大会で得た他校・関係機関からの反響や助言を生かし、「学校から地域へ、そして世界へ」というスローガンのもと、ユネスコスクールとして持続可能な社会の創り手を育む活動をさらに発展させていく。





ポスターセッション６

運営者/発表者
発表者；神奈川県立有馬高等学校　総括教諭　杉原孝治
内容



図１　ポスター発表に用いた資料

【当校における「総合的な探究の時間」の取組】

「総合的な探究の時間」はすべての高等学校で実施されている一方、その実施内容や探究の深さ・質には、学校間で一定の差が見られる。特に、公立高等学校では教員の異動が比較的多く、担当者の経験や専門性に依存することなく、継続的に質の高い探究学習を実施するための仕組みづくりが課題となる。そこで本校では、「総合的な探究の時間」を学校教育における探究学習の中核として位置付け、教員の異動があっても継続的に実施できる探究学習の体系化に取り組んでいる。探究的な学習を通して、①知識・理解、②思考力・判断力・表現力、③主体的に学習に取り組む態度の育成を図るとともに、他者と協働して課題の解決を目指す力の育成を重視している。本校では、学校の教育目標やこれまでの実践を踏まえ、「SDGs」「平和教育」「異文化理解・国際交流」を探究学習の重点領域として設定している。これらのテーマを軸に、社会課題を自分事として捉え、多様な価値観をもつ他者と対話・協働しながら考えを深める学習を展開している（表 1)。また、学びを学校内に限定せず、外部機関や専門家との連携を積極的に進めている。具体的には、「EU が学校にやってくる」や「伊勢半眉メイク講座」、NPO 法人 Colorbath による「ネパール支援の現状」に関する講座など、企業・NPO 法人等の協力を得て、多様な立場から社会課題について学ぶ機会を設定している。こうした外部講師の活用により、生徒が教室内では得にくい実社会の知識や多様な視点に触れ、学習内容を自らの問いにつなげることを目指している。さらに、生徒の興味・関心に応じて主体的に学びに向かう機会を保障するため、校外学習、ボランティア活動、SDGs バスツアー、カンボジア・スタディツアー等の複数の企画を年間を通して実施している。これらを校内では「有馬チャレンジ」と総称し、通常の授業とは異なる体験的な学びへの参加機会を提供している。以上の取組を通して、本校では「総合的な探究の時間」を単発的な活動として終わらせるのではなく、知識・理解を基盤として思考・判断・表現を深め、主体的に社会と関わりながら他者と協働して課題解決に取り組む学習として体系的に実施することを目指している。また、担当教員の異動があっても実践を継続・発展させられるよう、テーマや活動内容を共有・蓄積し、学校として探究学習の質を維持・向上させる仕組みの構築を進めている。

表 1　3 年間の「総合的な探究の時間」の実施内容（概要）

	1 年生	2 年生	3 年生
前期	・「探究」とは ・スライドの作り方と共有方法 ・参考文献のルール ・講演会とワークショップ	・高校生ビジネスプラングランプリ（班全員） ・ビジネスプラン中間発表 ※授業参観	・自分の進路や興味のある大学の講義動画を 3 本見て、その先生になったつもりでスライド化し、クラス発表会（全員） ※授業参観
後期	・SDGs みらい甲子園（班全員） （10 テーマに分けてアイデア出し） ・クラス内スライド発表会 ※授業参観	・修学旅行（沖縄）の探究学習 （水の問題） ・ポスター作りと発表会（体育館） ※授業参観	・自分が将来その分野で活躍した際、SDGs についてどのように貢献できるか、したいか、どんな課題があるかのスライド化とクラス発表会 ※授業参観

ポスターセッション 7

運営者/発表者
宇都宮大学共同教育学部附属特別支援学校/五月女智子・齊藤祥平・伴怜子（教員）
内容

藍から広がる「あい」の輪　　～藍を核とした ESD の実践～

藍を用いた様々な活動

本校では、近年「藍」を教育活動の核に据え、藍の栽培から藍染、製品づくり、販売・交流・発表までの一連の活動に取り組んでいる。これまで、大学教員から専門的な知識や技術を学ぶとともに、地域の方々、保護者、近隣校、学習ボランティア等との協働を進めることで、藍を媒介とした学びの輪を広げてきた。

中・高等部作業学習においては、各作業班が役割を分担し、藍を育て、染め、製品を作っている。この一連の流れの中で、植物と衣服・服飾、食などとの関わりに気付き、身近な自然や地域文化への関心を高めている。自分の役割を果たしながら活動する経験も積み重なり、主体的に行動する力や働く力の育成にもつながっている。

さらに、地域の方々との藍染交流会、藍苗の頒布、大学との藍染や藍茶・藍の実スイーツづくり、近隣高校との交流、学習ボランティアとの製品開発、地域を対象とした販売会など、藍をきっかけとして様々な人とのつながりが生まれている。

こうした学校外の人々との関わりは、児童生徒が地域の一員として社会とつながっていることを実感し、社会に踏み出す力を育む機会となっている。

地域（宝木地区）の婦人会との藍の苗植え、収穫



大学教員との協働（藍染、藍茶・スイーツづくり）





地域（宝木地区）の方々との藍染交流会藍苗の頒布



藍を通した学び

これまでの実践を振り返ると、

「体験して感じる・知る」→「つながって広がる」→「伝えてつなぐ」

という過程で深まりを見せている。

「体験して感じる・知る」では、藍を育て、染め、製品をつくるという直接的な体験を通して、地域の自然や文化、人々の営みに触れる。

「つながって広がる」では、地域、大学、他校、保護者、ボランティア等との協働を通して、自分たちの学びを広げ、多様な人の考えや価値に触れる。

「伝えてつなぐ」では、製品の販売・配布や発表、交流などを通して、自分たちが学んだ地域の価値を他者に伝え、次の人や未来へつないでいく。

これは、世界が急速につながる Society 5.0 の時代において、自分たちが暮らす地域の自然や文化、人とのつながりを見つめ、その価値を捉え直す学びにもつながる。地域を深

く知ることは、世界との違いや共通性に気付き、多様な人々と対話しながら自分たちの未来を考えることにつながる。

今後に向けて

今後は、これまで培ってきた「あい」の輪をさらに広げ、児童生徒が地域の方々とともに新たな活動を創り、学びの成果を地域や社会へ発信する機会を充実させたい。アパレル企業とのコラボレーションや、地域・保護者をつないだ生産・流通・消費の協働など、藍を通して新たな価値を生み出す活動にも取り組んでいく。

藍を「保存すべき伝統」として捉えるだけでなく、地域の自然・文化・人をつなぎ、新たな価値を生み出す学びの媒介として捉えていく。そして、互いの違いや価値を認め合い、支え合い、ともに新たな価値を創り出す「共に生きるかたち」を、学校と地域の協働の中で実現していきたい。

知ることを学ぶ　自然への関心の高まり

植物が、衣服や服飾、食と密接に関わっていることに気づき、本校で実践している環境教育とも相まって、身の周りの自然への関心が高まった。



為すことを学ぶ　自信の高まり

藍を育て、染め、製品づくりへとつなげる一連の活動を通して、自分の役割を果たしながら活動に取り組む経験を積み、主体的に行動する力や働く力の育成につながった。



人間として生きることを学ぶ　自然や文化への畏敬

藍や身近な自然との関わりを通して、自然を大切にする心や地域文化を尊重する態度が育まれた。また、自分たちが地域や社会とつながっていることを実感し、社会の一員として社会づくりに参画しているという実感が高まった。



共に生きることを学ぶ　地域理解、人との関わりの実感

地域の方々との触れ合いにより、地域資源への関心が高まった。また、学校外の方々と触れ合うことで、社会に踏み出す力の育成につながった。

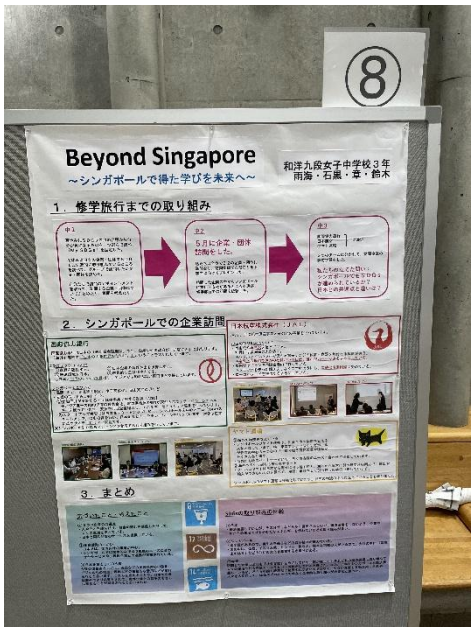
ポスターセッション８

運営者/発表者
和洋九段女子中学校高等学校／生徒１名
内容

本校では 2014 年度から、全教科で実施する PBL 型授業、総合学習・総合探究を中心とした SDGs の学び、地域、海外、官公庁、企業、教育機関など様々な連携先と繋がる「Connected School」の取り組みを進め、最終的には国内外で活躍できる女性の育成を目指している。本校のこの学びをさらに深化・発展させ、より多くの人々と対話や協働しながら学び合い・分かち合いたいと考え、2024 年 7 月にユネスコスクールへの加盟を申請した。チャレンジ期間が始まって以降、ASPUnivNet の創価大学からの指導を励みに活動を続け、2026 年 5 月にユネスコスクール正式加盟となった。

本発表は、2026 年 5 月に実施した中学 3 年シンガポール修学旅行中に行なった現地の日系企業 3 社への訪問とその学びについて、ポスターにまとめたものである。校内優秀グループを代表して 1 名が発表に臨んだ。

「Beyond Singapore ～シンガポールで得た学びを未来に～」（中学 3 年生　4 名）





①現地日系企業訪問までの流れ

2025 年 5 月　SDGs に先進的に取り組む企業・団体への訪問
（東京都内 33 企業・団体　含むオンライン取材）

2025 年 7 月　企業・団体訪問の成果発表会

2025 年 11 月　シンガポール修学旅行事前学習開始
・現地で訪問したい日系企業・団体への問い合わせ開始
・旅行会社との打合せ

2025 年 2 月　訪問予定 3 社の決定、事前学習開始

2026 年 5 月　シンガポール修学旅行実施　企業訪問実施

②訪問企業

(A)国際協力銀行　シンガポール駐在員事務所

(B)日本航空株式会社　シンガポール支店

(C)シンガポールヤマト運輸株式会社

これらの 3 社は、人、モノ、お金の流れを整え、国の経済や人々の暮らしを支えている。これらの企業について、日本とシンガポールでの企業活動の違い、シンガポールならではの活動、どのように社会課題の解決に関わっているか、などについて質問し、学んできた。

(A)国際協力銀行シンガポール駐在員事務所

シンガポールでは、土地や資源等の制約、少子高齢化、自由貿易後退などの課題がある中で、商船三井が実施する FSRU 傭船事業に対する融資、日本発スタートアップに加え、シンガポールを中心とする「ASEAN スタートアップ」にも投資を行い、日本企業とのコラボレーションを狙っているとのことだった。

(B)日本航空株式会社シンガポール支店

シンガポール支社では多国籍の人が多いため、例えばハラルとノンハラルで使える電子レンジの位置や、食器を片付ける位置が違うなどの対応をしている。また、宗教上の理由で休みの社員がいる日は、誰かがカバーできるようにしているなどが日本との違いである。機内食はチャンギ国際空港内で作っている。この理由はトラックを使った輸送をしなくてすむようにするためで、二酸化炭素削減に努めていることが分かった。また、できるだけローカルフードを提供するようにしているとのことだった。

(C)シンガポールヤマト運輸株式会社

特に東南アジアではシンガポールが物流の中心の一つなので、取り扱う荷物の量や種類がたくさんある。クロネコヤマトは日本から海外に引っ越す時と、海外から日本に引っ越す時の両方で、輸出や輸入ができないものを調べて、税関に申請をして引っ越しの手伝いをしている。地図や動物など、国によっては制限されるということを初めて知り、多民族国家のシンガポールでは細かい対応が必要になることを知った。



(企業訪問グループセッションの様子)

③まとめ

訪問した企業はどれも「社会貢献」をめざしていて、国が違ってもそれぞれの国の課題に取り組んで人々の生活や社会を良くしようという活動をしていると感じた。また、日本もシンガポールも経済発展しているが、どちらの国も経済だけ発展すればよいのではなく、少ない資源を有効活用し自然や人々を大切にして、SDGs のどれか一つではなく全体的な取り組みが必要だと思った。

ポスターセッション 9

運営者/発表者
東京都立多摩桜の丘学園
内容

東京都立多摩桜の丘学園における ESD・SDGs の取組

1. 学校の概要と取組の目的

東京都立多摩桜の丘学園は、東京都多摩市にある、肢体不自由教育部門と知的障害教育部門を併置する特別支援学校である。同校は、「質の高い教育活動」と「共生と貢献」の実現を目指し、「持続可能な社会の創り手になろう！」を掲げている。SDGs を通じて、地域社会や国際社会への貢献、他者との協働、取組の発信などを実現するため、ESD（持続可能な開発のための教育）を推進している。

取組は令和 4 年度から令和 13 年度までの 10 年間を 3 期に分けて進められる。第 1 期「準備期」（令和 4～7 年度）に基盤を整備し、第 2 期「充実期」（令和 8～10 年度）には校内での実践を充実させるとともに、校外への発信を進める。第 3 期「発展期」（令和 11～13 年度）には、取組をさらに発展させる計画である。

2. 第 1 期「準備期」の取組（令和 4～7 年度）

令和 4 年度には、年間指導計画に SDGs を位置づけ、地域の学校と協働して「SDGs の樹」を制作するなど、教育活動と地域への発信を進めた。

令和 5 年度には、児童・生徒が SDGs を主体的に捉え、活動できるよう教育課程を改善するとともに、ユネスコスクールへの加盟を申請し、「ユネスコスクールチャレンジ校」の認定を受けた。令和 6 年度には、全校および各学部での実践と評価を行い、その成果を校内発表会で共有した。

令和 7 年度にはユネスコスクールへの登録を実現した。また、東京都の「社会の課題に対応した教育活動の充実」に関する研究指定を受け、ESD 推進リーフレットや実践集を作成した。さらに、世界国際デーに関連する学習を年間指導計画に取り入れ、ESD を学校全体の教育活動に位置づけるための基盤を整えた。

3. 第 2 期「充実期」の実践計画（令和 8 年度）

第 2 期では、ESD に関する学習活動を継続・充実させるとともに、学校全体での取組や地域への成果発信を進める。令和 8 年度の主な実践は、次のとおりである。

（1）エコキャップ・インクカートリッジの回収

小学部・中学部では、生活単元学習や総合的な学習の時間を活用し、エコキャップやインクカートリッジの回収に取り組んでいる。世界で困難な状況にある子どもたちへの支援を目的とし、児童・生徒自身が回収箱を制作したり、協力を呼びかける言葉を話し合ったりする。また、近隣の小・中学校や校内の他部門にも協力を依頼し、共同で回収活動を進めている。

（2）コンポストづくり

肢体不自由教育部門の中学部では、給食で出たニンジンの皮を活用したコンポストづ

くりを行っている。児童・生徒が毎日ニンジンの皮を細かくして土と混ぜ、1 年間かけてつくったコンポストを、校内の畑や花壇の肥料として利用する。収穫した野菜を給食に活用したり、花壇の花を地域の人々に見てもらったりすることで、資源の循環を学ぶ機会としている。

（3）募金活動と国際支援

中学部・高等部などでは、ダルニー奨学金やユネスコ募金を通じて、世界の子どもたちを支援する活動を行っている。児童・生徒は、募金を呼びかける言葉を話し合い、近隣の駅で街頭募金を実施するほか、書き損じはがきの回収にも取り組む。また、出前授業を通じて支援の意義を学び、理解を具体的な行動につなげている。

（4）「さくら運送」による地域貢献

知的障害教育部門の高等部では、作業学習の一環として「さくら運送」を実施している。地域のお年寄りや子育て中の人々が購入した品物を、自宅まで無料で運ぶ取組である。利用者を増やすためのチラシやスタンプカードの作成に加え、受付や配達時の挨拶・会話など、適切な接客方法も考えながら活動している。地域の人々と直接関わることで、他者の役に立つことを実感できる実践となっている。

（5）全校的な取組と成果発信

令和 8 年度には、「多摩桜祭」で「ESD の桜を咲かせようプロジェクト」の 3 か年計画を立案・実施する。また、世界国際デーに関連する内容を、避難訓練や給食、保健だよりなどにも取り入れる。成果については、ユネスコスクール関東大会や多摩市子どもみらい会議での報告を計画している。

4. 令和 9 年度・令和 10 年度の計画

令和 9 年度には、年間指導計画を ESD・SDGs との関連から整理し、「ESD の桜を咲かせようプロジェクト」を実施する。また、交流校への参加呼びかけや、世界国際デーにちなんだ給食メニューの提供を行うとともに、創立 20 周年に向けた「多摩桜子どもみらい会議」の開催を検討する。

令和 10 年度には、創立 20 周年の機会に同会議を開催し、地域への発信を進める。さらに、令和 11～13 年度の第 3 期に向けて、ESD に関する取組を立案する計画である。

5. 取組の特徴とまとめ

多摩桜の丘学園の ESD・SDGs の取組の特徴は、持続可能な社会についての学習を、児童・生徒が実際に参加できる活動に結びつけている点にある。回収活動やコンポストづくり、募金活動、地域への配送サービスなどを通じて、自分たちにできることを考え、他者と協力し、社会に働きかける機会を設けている。

また、近隣の学校との協働や地域住民へのサービス、国際的な支援活動を通じて、学校内にとどまらない社会とのつながりを形成している。特に「さくら運送」は、地域の人々の生活を支えると同時に、児童・生徒が社会への貢献を実感できる取組である。

さらに、これらの実践を年間指導計画や教育課程に位置づけ、複数年にわたって継続・発展させることを目指している。第 1 期に整備した基盤をもとに、第 2 期では実践の充実と校外への発信を進め、将来の発展期へとつなげる構想となっている。

ポスターセッション 10

運営者/発表者
新座市立片山小学校　/　教師２名（小山/伊藤）
内容

地域と企業とともに育む“生きる力”

―産官学民連携の実践―

１　はじめに



本校は創立 152 周年を迎える、市内でも最も歴史のある学校である。長年にわたり地域との結び付きが強く、総合的な学習の時間を中心として、地域の魅力を調査・発信する活動に取り組んできた。その過程では多くの地域企業や団体の協力を得ながら学習を進め、子供たちは取材や体験活動を通して地域理解を深めてきた。

また、企業訪問や出前授業などの外部人材を活用した学習も積極的に取り入れている。学んだ内容を保護者や地域住民に向けて発表するだけでなく、地域行事への参加や町内会への企画提案など、実社会と関わる学習機会を数多く設けてきた。学校行事には地域の方々が積極的に参加してくださり、本校は地域とともに子供を育てるコミュニティ・スクールとして教育活動を展開している。

こうした継続的な地域連携の実績を基盤として、本年度はこれまでにない規模の取組として、マルイファミリー志木様との連携による商品開発プロジェクトを実施することとなった。

２　取り組みの概要

本プロジェクトでは、「I♡新座フェス」をテーマに、地域の魅力を発信するオリジナル商品の開発から販売までを行う。

子供たちはこれまで、地域企業への取材や調査活動を通して地域の特色や魅力を学び、それを校外へ発信する経験を積み重ねてきた。本プロジェクトでは、その学びをさらに発展させ、「地域の魅力を商品という形で表現する」という新たな挑戦に取り組む。

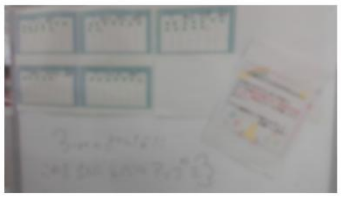
また、マルイファミリー志木様だけでなく、市のプロモーション課や地域企業、保護者、地域住民など様々な立場の方々と協働しながら学習を進めている。それぞれの専門性や視点を生かした支援を受けることで、子供たちは社会の中で多様な人々と協力しながら課題を解決する力を育んでいる。

３　活動内容

活動期間は数か月にわたり、商品企画、調査、試作、プレゼンテーション、改善を繰り返しながら販売へとつなげていく。各学級では、「クレープ」「カレー」「焼き菓子」をテーマに設定し、新座市や学校の魅力を伝える商品づくりを進めている。

子供たちは地域について改めて調査し、「どのような商品なら地域の良さを伝えられるか」「どのような人に購入してもらいたいか」を考えながらアイデアを出し合った。その

後、企業の方々へのプレゼンテーションを行い、専門的な助言を受けながら企画を改善している。



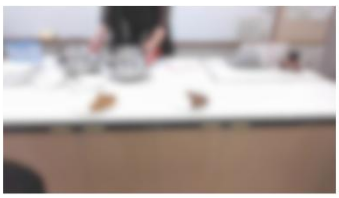
活動を進める中で、子供たちは地域の魅力について理解を深めるだけでなく、「相手は何を求めているのか」「どのように伝えれば魅力が伝わるのか」といった他者意識を高めている。また、実際の商品開発にはコストや製造工程など様々な制約があることを知り、理想と現実の折り合いをつけながらより良い商品づくりに挑戦している。
こうした経験は、教室内だけでは得られない実社会とのつながりを実感する貴重な学びとなっている。

4　授業の工夫



本プロジェクトでは、単に商品アイデアを考えるだけではなく、自分たちの思いや願いを明確にしながら学習を進められるよう工夫している。
まず、「この商品がどのような未来をもたらすのか」「どのような願いを込めたいのか」を整理するワークシートを活用し、思考の可視化を図った。子供たちは自分の考えを言語化するとともに、友達同士で相互評価を行い、多様な視点から企画を見直している。
また、自分たちのアイデアを効果的に伝えるために、「情報の収集と整理」「根拠をもった説明」「プレゼンテーション資料の作成」「聞き手を意識した発表方法」
など、情報活用能力の育成にも重点を置いている。
さらに、企業の方々との打ち合わせでは、「実現可能性」という視点から意見をいただいている。子供たちは自分たちの思いを大切にしながらも、現実的な条件を踏まえて改善を重ねることで、社会との接点を意識した学びを深めている。

5　成果と今後の展望



本プロジェクトは現在も進行中であり、11 月には実際の販売を予定している。今後は販売方法の工夫や効果的な広報活動など、新たに検討すべき課題も多く存在している。しかし、このような実社会とつながる学習活動は、日頃の国語や社会、算数などで身に付けた基礎的な学力を実際の課題解決に生かす機会となっている。子供たちは学習内容の必要性を実感しながら主体的に学びを深めている。また、本取組を一度限りの特別な活動として終わらせるのではなく、他学年や次年度へと学びを継承していくことが重要である。地域や企業とのつながりを継続しながら、子供たちが社会の一員として主体的に地域に関わり、自らの力で望ましい未来を切り拓いていく力を育むことが求められる。
地域・企業・行政・学校が連携して取り組む本プロジェクトは、まさに「生きる力」を育む実践である。今後も地域とともに学び、地域とともに成長する教育活動を推進していきたい

ポスターセッション 12

運営者/発表者
千葉県立成田西陵高等学校 園芸科作物専攻/5 名
内容

日本茜を題材とした地域課題の解決に向けた探究学習の実践

1.活動概要

本校園芸科作物専攻では、課題研究の授業において、日本古来の染料植物である日本茜を題材に探究活動を行っている。日本茜は伝統的な染料植物であるが、近年は栽培者の減少により文化の継承が課題となっている。また、地域では耕作放棄地の増加や里山環境の維持などの課題も見られる。そこで本校では、日本茜を通して環境保全、地域連携、伝統文化の継承を目指した活動に取り組んだ。





2.活動内容

地域調査や聞き取り調査を通して、耕作放棄地の増加、生物多様性の減少、伝統文化の継承の難しさといった地域課題を把握した。その解決に向け、耕作放棄地を活用した日本茜の栽培や、竹炭・堆肥を利用した土壌改良に取り組んだ。また、日本茜染めの技術を学びながら地域イベントや展示活動を行い、普及活動を進めた。

活動では地域住民、大学、研究機関、小学校、染色団体など多様な主体と協働した。さらに、「高校生による日韓ユネスコスクール共同・協働スタディツアー」への参加に向けた事前交流として、参加者とともに日本茜染め体験を実施した。日本茜を通して環境や文化について学び合う機会となった。

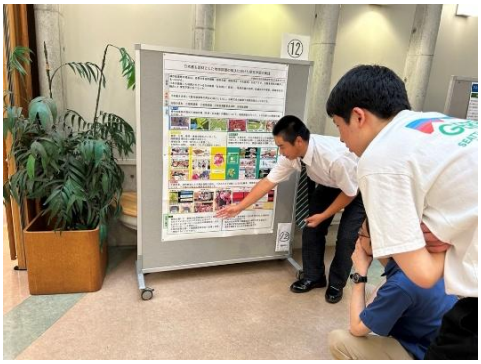




３.発表内容

ポスター発表では、次の内容について紹介した。

耕作放棄地を活用した日本茜栽培
日本茜染めによる伝統文化の継承
地域住民や大学等との連携
日本茜の成分分析
小学生を対象とした環境教育
日韓ユネスコスクール交流



４.成果

活動を通して、生徒は栽培技術や染色技術に加え、地域課題を発見し、多様な人々と協働しながら課題解決に取り組む力を身に付けることができた。

また、ESD 成果発表会や生徒研修会での発表を重ねる中で、自らの活動を客観的に見つめ直す機会となった。さらに、日韓スタディツアーでは、日本茜を通じて文化や価値観の違いを学び、地域の取組が国際交流へと発展することを実感した。

５.今後の展望

今後も日本茜の栽培や染色文化の継承、小学生との体験学習、地域イベントでの普及活動を継続し、持続可能な地域づくりに貢献していきたい。また、国内外の学校や団体との交流を通して、環境保全や文化継承について考える機会を広げていきたい。



ポスターセッション 13

運営者/発表者
学生環境団体 SONE ： 田口美波、中村紋菜、木村孔、森優清
内容
学生環境団体 SONE は、学生が主体となって「無理のない、快適な省エネ活動」を理念に、カーボンニュートラルを目指して活動している団体である。 今回のユネスコスクールではポスターセッションと学内ツアーを行った。 ポスターセッションでは、過去に行った断熱 DIY ワークショップと小学生に向けた環境教育講座を中心に SONE が実践している環境活動について説明した。また学内の太陽光パネル設備についても紹介した。 またポスターセッションをする中で、SONE について興味を持ったところの感想や大学の太陽光パネルについての質問を受けた。質疑応答を行い、外部の方の意見を聞くことができ SONE について改めて理解を深めることができた。 学内ツアーは二回実施し、太陽光パネルや葡萄畑ソーラーシェアリング、断熱化した教室を説明しながら回った。ツアーに参加した人からは、太陽光パネルの使用量や設置費、断熱化の効果など質問を受けたり、現在行っている環境活動について意見交換を行ったりした。

学生環境団体SONE



無理のない快適な省エネ活動を理念に、
カーボンニュートラルを目指す団体

01 SONE

学生団体SONEは、2018年に設立した団体です。

学生が主体となって「無理のない」「快適な」省エネ活動に取り組んでいます。

社会課題の解決に向けたプロジェクトやイベントを企画、運営しています。

02 断熱DIY活動

教室の断熱化によって
「夏は涼しく、冬は暖かい」快適な環境づくりに
取り組んでいます。

断熱材や二重窓などを活用することで冷暖房効率を向上させ、省エネルギーやCO_2排出量の削減に貢献しています。

また学生がDIYワークショップを通して施工に参加し、環境問題やSDGsについて実践的に学ぶ活動としても展開しています。

【実施場所】

2号館、4号館





断熱化には杉を使用

木材の中で断熱性が高く、
建材として優秀





03 環境教育活動

鎌ケ谷市・市川市の小学校で環境教育を実施しています。
地球温暖化や省エネルギーについて、クイズや体験を
交えながら学び、環境意識の向上につなげています。

04



太陽光パネル



ソーラーシェアリング

ポスターセッション 15

運営者/発表者
千葉商科大学人間社会学部プロジェクト実習:人社プロモーション・プロジェクト/小口広太（教員）・学生 2 名
内容
ポスター発表「サステナブルな社会をつくる人社の魅力を発信」 人社プロモーション・プロジェクトは、人間社会学部（通称：人社）の魅力発信を目的に活動している。主な活動内容は、「オープンキャンパス学部ブースの企画と運営」「学部公式インスタグラムの更新」である。 プロジェクトの到達目標として、次の 4 点を掲げている。 ① 人間社会学部が掲げるサスティナビリティ人材やウェルビーイングな社会について学びを深める。 ② オープンキャンパスで人間社会学部の学びが伝わるような学部ブースをつくり、企画提案力を養う。 ③ 高校生や保護者との対話・交流をつうじてコミュニケーション力を高める。 ④ インスタグラムを定期的に更新し、情報発信力と広報スキルを身に付ける。 前期は、人間社会学部の学びを発信する掲示物の作成に力を入れた。例えば、高校生目線に立って知りたいことを言語化し、文章にまとめた。さらに、1 年生の必修科目「人間社会入門」「ウェルビーイング概論」「社会学の世界」の授業形態を座学、グループワーク、発表の 3 点から説明し、★印の数でわかりやすく表現した。 今年度から通年科目「プロジェクト実習」が始まった。その中から「市川観光プロモーション・プロジェクト」「アドベンチャーツーリズム・プロジェクト」「地域の子育て共創プロジェクト」を取り上げ、「実践する社会学」の活動内容を紹介した。 後期は、高校生や保護者に人間社会学部の学びを伝えるツールとして、大学近くのドーナッツ専門店と連携し、食品ロスになるフェアトレードバナナを使用したドーナッツの商品化を予定している。地域コミュニティとのつながりをつくり、食品ロスの削減やフェアトレードなど社会課題の解決を実践しながら、人間社会学部の学びを発信していきたい。

千葉商科大学人間社会学部
プロモーション・プロジェクト

25b0005前田瑞季　25b0084伊藤優衣

目的

- オープンキャンパスに来場された高　校生や保護者に人社の魅力を伝え、入学生を増やす
- 高校生だけでなく学部生やその他の人にも人社の活動を広める
- 学部オリジナルグッズの制作
- 地域と連携した商品開発

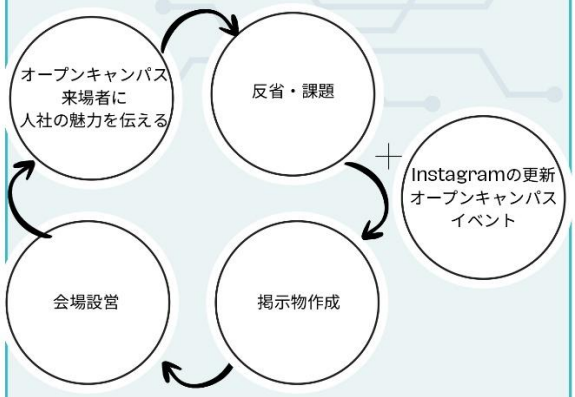


成果

- 高校生・保護者から興味関心を持ってもらえる
- Instagramのフォロワー数450人突破



活動内容



課題・改善

- 掲示物に関心を持たれにくい
- 学生相談スペースの活用　少
- 高校生にアンケートを取り興味のあることを聞く
  ⇒掲示板・個別スペースに活用



成長

- コミュニケーション能力
- 言語化能力
- 企画力
- 課題解決力 向上



展望

- 高校生へのアンケート
- インスタグラムの定期更新
- 他のプロジェクト実習との連携
- 学部パーカーの作成
- 食品ロスになるフェアトレードバナナを使用したDONADONAドーナツさんとのコラボ

ポスターセッション 16

運営者/発表者
千葉商科大学人間社会学部プロジェクト実習 ： 防災コミュニティ・プロジェクト/藤井紘司（教員）・学生 3 名
内容
本プロジェクトは、災害に対して受け身になりがちな学生の防災意識を高め、主体的に行動できる力を育てることを目的としています。 「防災」をたんなる知識や訓練としてではなく、暮らしを支える文化としてとらえ、日常生活の中に根づかせることを重視します。 学内では、アンケート調査や SNS での情報発信、学内イベントの企画・運営を通して、学生自身が防災の意識を高めながら、その大切さを周囲に伝えます。 さらに、地域では、宮城県石巻市や近隣をフィールドとした聞き書き調査などを通して、人びとの暮らしに根ざした防災文化や生活の知恵を掘り起こし、それらを自分たちの暮らしに生かす視点を育てます。

大学生の防災意識と備えの実態に関する調査報告

――居住形態に潜む「防災格差」と避難訓練の有効性――

防災コミュニティ・プロジェクト（福元　寿弥・竹川　優奈・武井　悠貴）

NO BOUSAI, NO LIFE.

調査の背景と目的

災害リスクが高まる中、学生をはじめとする若年層は防災の必要性は理解していても、実際の備えには移せていないのではないかという課題意識があった。そこで、千葉商科大学の学生を対象とし、「日頃どのような防災対策を行っているか」「災害時にどのような行動をとるか」を定量的に把握することとした。

調査概要

実施主体：千葉商科大学人間社会学部
「プロジェクト実習（防災コミュニティ・プロジェクト）」
調査期間：2026年6月26日～2026年7月3日
調査対象：本学在学生
調査方法：全学ポータル配信WEBアンケート（任意回答）
有効回答数：321人※

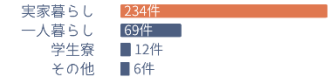
調査結果（単純集計）

浮き彫りになった「無防備な現状」

本調査において、回答者の多くが高い帰宅困難リスクを抱えている一方で、基本的な防災行動（家族との話し合いや避難訓練の参加等）が著しく不足している現状が明らかとなった。

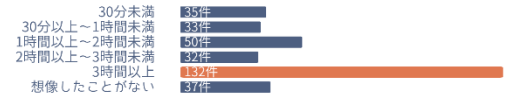
約7割が実家暮らし。

Q2　現在の居住形態



約4割が徒歩3時間以上。多くの学生が"帰宅困難"の危機に

Q16　交通機関停止時の徒歩帰宅時間



過半数が家族と未相談。いざという時の連携に課題

Q5　家族や身近な人との安否確認方法の話し合い



7割以上が訓練未経験！？

Q17　学校内の避難訓練への参加経験



身近な学校内の防災知識も、極めて希薄な状態

Q19　学校内の避難場所の認知



Q20　学校の防災マップの確認経験



※本調査のサンプリングに関する補足
本調査は全学ポータルでの配信に加え、特定の授業内での回答呼びかけを実施したため、回答者の多くが人間社会学部（約7割）および1・2年生（約9割）に集中している。そのため本分析は、同層における防災意識の実態と課題を色濃く反映した結果となっている。

分析①：実家暮らしと一人暮らしの間に「防災格差」！？

――データが語る備えのリアルと死角

居住形態が学生の防災行動に与える影響を分析した結果、備えにおける明確な「構造的格差」が浮き彫りになった。「飲料水の準備」や「家具の固定」といった物理的な備えにおいて、一人暮らしの実施率は実家暮らしを大きく下回っている。では、一人暮らしの学生は防災意識が低いのだろうか。興味深いことに、「ハザードマップの確認率」は実家暮らしと一人暮らしで差がなく、潜在的な意識に違いは見られない。すなわち、一人暮らしの学生は「意識はあっても、学生個人の経済的な負担や賃貸住宅特有の事情など、具体的な行動に移すハードルが高い」のが実態である。一方で、実家暮らしの学生にも大きな死角が存在する。災害時の連絡手段を「特に対策していない」割合が半数を超え、一人暮らしに比べ連絡体制が極めて無防備なのである。学生自身が「自分の居住環境にはどのような備えの死角が潜んでいるのか」を正しく認識することこそが、実効性のある防災への第一歩となる。

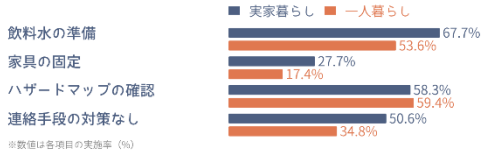


図1　防災行動の比較（実家暮らし　vs　一人暮らし）

分析②：避難訓練の意外な効果！？

――家庭の安否確認方法の話し合いをうながすために

「備蓄確認」や「ハザードマップ確認」などの質問項目から学生の防災意識を層化（グループ分け）し、避難訓練の参加経験の有無と「家族との話し合い」の関連を分析した。その結果、防災意識の高さに関わらず、避難訓練の経験がある学生は、未経験者に比べて家族との話し合い実施率が一貫して高いことが判明した。

本調査で「家族との安否確認の話し合い」との間に最も強い相関が見られたのは「過去の災害経験（被災体験）」の有無であり、経験者は未経験者に比べ話し合いの実施率が極めて高い（76.0%）。しかし、「子どもたちに対する防災教育は、子どもたち自身への教育にとどまらず、保護者へと波及する可能性を持つ」と指摘する先行研究があるとおり、本調査データからも、避難訓練の機会拡充は、被災経験を持たない学生にとって、家庭全体を巻き込む「疑似体験」として極めて高い意義を持つといえる。

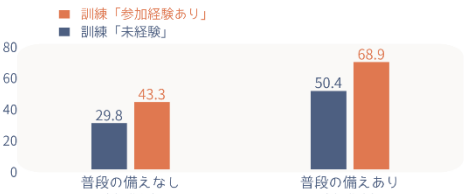


図2　訓練参加×防災意識別「家族との話し合い」実施率（%）

ポスターセッション 17

運営者/発表者
千葉商科大学人間社会学部プロジェクト実習:地域探求型メタバース・プロジェクト 鎌田光宣（教員）・学生 2 名
内容
「地域探究型メタバース・プロジェクト」は、地域の魅力や文化を調査し、その成果をメタバースという新しい表現手段を使って発信する、地域連携型の実践プロジェクトです。2026 年度は福島県須賀川市を題材とし、千葉商科大学の学生と福島県立清陵情報高等学校の高校生が連携しながら、地域について調べ、そこで発見した魅力を 3D の仮想空間として表現することに取り組んでいます。単に「きれいなメタバース空間を作る」ことが目的ではありません。地域の歴史や文化、観光資源を調査し、何を取り上げればその地域らしさが伝わるのか、誰にどのような順序で体験してもらうのかを考え、調査、企画、制作、発信までを一つのプロジェクトとして進めています。 今回、特に注目している地域資源が「松明あかし」と「須賀川牡丹園」です。松明あかしは、戦国時代の出来事に由来し、430 年以上にわたって受け継がれてきた須賀川を代表する伝統行事です。現在も巨大な松明が夜空を焦がす勇壮な火祭りとして知られています。一方、須賀川牡丹園は江戸時代に始まった歴史ある庭園で、現在は多くの品種の牡丹が植えられています。また、牡丹園として国の名勝に指定されている全国でも珍しい場所です。このように、須賀川には長い歴史を持つ祭りと、全国的にも特徴のある文化的景観が存在しており、これらをデジタル空間でどのように表現するかを学生や高校生が考えています。 さらに須賀川市は、「特撮の神様」と呼ばれる円谷英二監督の出身地としても知られています。市内には円谷英二ミュージアムや須賀川特撮アーカイブセンターがあり、特撮文化を生かした地域振興も進められています。つまり須賀川は、歴史ある祭りや牡丹園だけでなく、「空想の世界を形にする」という文化とも深い関係を持つ地域です。現実の地域資源を調べ、それを 3D の仮想空間として再構成する本プロジェクトは、こうした須賀川の特色とも相性がよいと考えています。 メタバースの基盤には Hubs Community Edition、Hubs CE を使用しています。Hubs CE は Web ブラウザから利用できるため、専用アプリをインストールしなくても、URL や QR コードから 3D 空間に参加できます。パソコンだけでなく、スマートフォンなどからも利用しやすいことが特徴です。また、オープンソースで提供されているため、自らサーバーを運用し、用途に応じて環境を構築できる点も大きな利点です。本プロジェクトでは、Blender を使って建物、植物、松明、景観を構成する小物などの 3D モデルを制作し、それらを Hubs CE の空間に配置しています。VR 機器を持っている一部の人だけではなく、多くの人が気軽に地域の魅力に触れられる環境を目指しています。

このプロジェクトで重要なのは、メタバースを現地観光の代わりにすることではありません。仮想空間を通して「この場所についてもっと知りたい」「実際に行ってみたい」と思ってもらい、現実の地域への関心や訪問につなげることを目指しています。観光パンフレットや Web サイトでは、写真や文章を中心に地域を紹介しますが、メタバースでは空間の中を自分で歩き、見たい場所を見て、順番を選びながら体験できます。こうした体験性を生かして、地域の魅力をより印象的に伝えようとしています。

制作は学生が役割を分担して進めています。全体の進行を管理する PM、Hubs CE や 3D 制作など技術面を担当するテックリード、地域を調査して展示や体験内容を考えるコンテンツプランナー、活動の発信やイベントを担当する広報・運営など、それぞれの得意分野を生かして一つの成果物を作ります。さらに、地域を身近に知る高校生の視点を取り入れることで、外部の人間が観光地を一方的に紹介するのではなく、地域に関わる若者自身が「何を地域の魅力として伝えたいか」を考える活動にしていきます。

また、この活動には教育的な意味もあります。学生は 3D 制作の技術だけを学ぶのではなく、地域について調べる力、情報を整理する力、相手に分かりやすく伝える力、役割を分担してチームで進める力、完成したものを評価して改善する力などを実践的に学びます。高校生にとっても、自分たちの地域を別の視点から見直し、その魅力をデジタル技術で表現する経験になります。メタバースそのものを学ぶことに加え、地域探究や協働学習、情報発信を組み合わせていることが、このプロジェクトの特徴です。

今後は、高校生との協働をさらに本格化させ、メタバース空間を完成させるだけでなく、実際に多くの人に体験してもらい、その反応をもとに改善を重ねていく予定です。一方で、3D モデルや画像を増やすほどデータ容量が大きくなり、読み込み時間が長くなるという課題もあります。ブラウザから簡単に入れるという Hubs CE の強みを生かすためには、見た目の魅力とデータの軽量化を両立させる必要があります。この点も、実際に制作を進めながら検証している重要なテーマです。

最終的には、須賀川市での実践を一つのモデルとして、地域調査、高校と大学の連携、3D 制作、メタバースでの公開、利用者による評価と改善という一連の方法を整理し、他の市町村にも応用できる「地域探究型メタバース」の仕組みへ発展させることを目指しています。地域の魅力をデジタル空間で再発見し、それを現実の観光や交流、地域学習へつなげていくことが、このプロジェクトの大きな目標です。





ポスターセッション 18

運営者/発表者
千葉商科大学人間社会学部プロジェクト実習:市川観光プロモーションプロジェクト/山田耕生（教員）・学生 2 名
内容
【プロジェクトの目的】 本プロジェクトでは市川市内の自然や歴史、文化といった地域資源を SNS 等などの方法で PR するほか、イベントを実施することで市川市の観光を盛り上げ、活性化を図っていきます。 【春学期の活動】 ①市川市内でのフィールドワーク 5 月から 6 月にかけて中山・本八幡、行徳、国府台の各エリアにおいてフィールドワークを実施。各エリアの担当者が事前に調査した内容をもとに、見どころを紹介したうえで実際にエリアを巡り、市川市内の地域資源の魅力を再発見することができた。 ②ゲストスピーカーによる SNS 発信講座 市川市内で SNS を中心とした情報発信に取り組んでいる本八幡 bot.様を招き、市川市の観光動向および SNS による情報発信について講義していただいた。 【成果と今後の予定】 ①インスタグラム「市川のトリセツ」開設 7月上旬に本プロジェクト公式 Instagram「市川のトリセツ」を開設。月4 回の投稿を目標に取材と情報発信を行っていく予定です。 ②来年 2 月にイベントを実施 これまでのフィールドワークやゲストスピーカー、これからの SNS 発信での学びを活かし、冬に市川をプロモーションするイベントを開催予定です。

市川観光プロモーションプロジェクト

＜プロジェクト概要＞

本プロジェクトでは市川市内の自然や歴史、文化といった地域資源をSNS等などの方法でPRするほか、イベントを実施することで市川市の観光を盛り上げ、活性化を図っていく。

市川市内でのフィールドワーク

中山・本八幡、行徳、国府台の各エリアにおいてフィールドワークを実施。各エリアの担当者が事前に調査した内容をもとに、見どころを紹介。実際にエリアを巡ることで市川市内の地域資源の魅力を再発見することができた。



5/11

中山法華経寺
神明社
水木洋子邸
葛飾八幡宮
八幡の藪しらず



5/19

行徳神輿ミュージアム
徳願寺
妙覚寺
（キリシタン燈籠）
権現道
ふれあい伝承館



6/5

弘法寺と涙石
手児奈霊神堂
文学の道

ゲストスピーカーによるSNS発信講座

6月12日の授業では市川市内でSNSを中心とした情報発信に取り組んでいる**本八幡BOT様**をお招きし、市川市の観光動向およびSNSによる情報発信について講義していただいた。







本八幡BOT

Xフォロワー2.4万人
INSTAGRAMフォロワー約5000人

学生の声

メンバーA

今回、市川観光プロジェクトの活動として人間社会学部マルシェを取材して、一番感じたことは、取材をすることと集めた情報をまとめることの難しさだ。実際に会場へ足を運び、出店者の方に声をかけて写真を撮らせていただいたり、イベント全体の雰囲気が伝わるように動画を撮影した。しかし、「取材」と一言で言っても、写真や動画の撮影、インタビュー、会場の様子の確認など、やるべきことが想像以上に多く、限られた時間の中で進めることの大変さを実感した。

メンバーB

取材後に情報をまとめる作業では、集めた内容をそのまま使うのではなく、「どの情報を伝えるべきか」「どの写真や動画が一番魅力を伝えられるか」を考えながら取捨選択する必要があり、その判断の難しさも学んだ。実際には多くのブースを取材し、たくさんの写真や情報を集めたが、SNSで発信する際に使用したのは全体の3分の1程度だった。

限られた情報の中でイベントの魅力を分かりやすく伝えることは想像以上に難しく、情報発信には工夫が必要だと感じた。人間社会学部マルシェの取材を通して、**取材や情報発信の大変さ**だけでなく、その**重要性**についても学ぶことができ、とても良い経験になった。

今後の展望

○インスタグラム「市川のトリセツ」開設！！

7月上旬に本プロジェクト公式INSTAGRAM「市川のトリセツ」を開設。今後は月5回の投稿を目標に取材と情報発信を行っていく予定。お楽しみに！！

○イベントを実施予定！！

これまでのフィールドワークやゲストスピーカー、これからのSNS発信での学びを活かし、冬に**市川をプロモーションするイベントを開催予定。よりよいものにするため、アンケートにご協力ください！！**



フォローお願いします！

@CUCYAMAPRO

大学生企画イベントに関するアンケート

ポスターセッション 20

運営者/発表者
千葉商科大学人間社会学部プロジェクト実習:サステナブルなモビリティのあり方/福島大晴・伊藤礼菜
内容
「アクセルブレーキ事前表示装置の試作と評価―ドライバーを支援する事前事故防止装置の普及させる方法とは何か？―」 「サステナブルなモビリティのあり方」では、自動車のドライバーによるペダル踏み間違え事故を抑制する装置:ABOiD を普及させることを目的に活動している。7 月までの主な活動は、「本装置の必要性の理解」と「試乗に向けた取り付けマニュアル作成の準備」である。 「本装置の必要性の理解」のため、交通事故・ペダル踏み間違え事故の現状を統計データから分析した。また、自動車事故数の大幅減少が見込まれない理由として、自動車の利便性を仮説とし、普及に至る社会的背景を考察した。 また、現行の自動ブレーキシステムは事故発生を強制的に防止するのに対し、ABOiD はドライバーの知覚・判断を支援して事故発生を抑制する、という特異性を持つ。また、自動車に外部取り付けする装置のため、どの自動車にも後付けできるという普遍性を持つ。 本装置の特色は聞き手に「効果がない」・「煩わしい」といった印象を抱かせる可能性があり、我々の活動では消費者向けの試乗会を開催することを目標とした。そのため、「試乗に向けた取り付けマニュアル作成の準備」として本学社用車への事前取り付けを実施した。これは、取り付けにおける障害の発見とマニュアル作成のための写真撮影を目的とした。 今後の展望として、8 月に安全運転を対象とした研究団体を訪問し、試乗会の実施とフィードバックを計画している。 また、後期ではプロトタイプを改良し 100 台程度を発注することを計画している。プロトタイプを賛同者伝えに広く配布することによって、試乗会での共感を連鎖させること、所要時間の大幅短縮を図る。 自動車の利便性を肯定しながらも手軽に安全性を高める装置として、他安全装置との併用による安全なまちづくりを実現したい。

アクセルブレーキ事前表示装置の試作と評価
ードライバーを支援する事故防止装置を普及させる方法とは何か？ー

福島大晴　伊藤礼菜

問題の背景
1.交通事故の状況

交通事故の多くは乗用車によるものであり(表1)、利便性と同時に危険性を持つ。



表.当事者送還別事故件数（2025年）(ⅰ)

ペダル踏み間違え事故件数は減少傾向にあるものの、2020年から横ばいである。(図1)

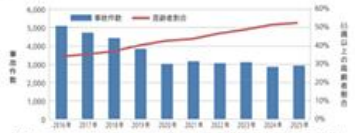


図1.ブレーキとアクセルの踏み間違いによる事故件数の推移（1当四輪車、2025年）(ⅰ)

2.ABOiD

ABOiD（アボイド）とは、千葉商科大学名誉教授の小栗幸夫氏らが開発・事業化を進めている自動車のペダル踏み間違い事故防止装置のこと。



写真（ⅱ）のように、車に取り付け、自分がどちらのペダルに足を置いているかを可視化することが出来る。

3.本装置の必要性

足下を可視化することで、無意識の誤操作をリアルタイムに警告することができる。
事故リスクを低減することができる。
今乗っている車に後付けできる。
プレゼントとして送ることができる。
パニックを防ぐことができる。
光の情報だけなので、運転の邪魔になりにくい。
車外の安全を守る自動ブレーキだけでは補えない、車内の不具合を検知することができる。
自分の目と足で確認・操作することができる。

4.普及に向けた構想

運転経験がある人に試運転してもらい、製品の重要性を推す。
数台～十数台規模でデータを蓄積する。
公用車に業務用として導入してもらう。
信頼性を獲得したのちに、一般へ展開する。

モニター体験会によって、**説明以上に製品の利便性を実感**してもらう。

5.現在の取り組み

試乗に向けた取付マニュアル作成の準備として、本学社用車への取付を実施。
（2026年6月24日　at.本学駐車場）



ペダル＆センサー部　　運転席での視界確認

いかなる形状の車体にも取付が容易となるよう、ABOiDの可変域を広げる必要性があることを認識した。

6.今後の展望

［短期目標］
安全運転に関心を持つ団体を訪ね、試乗会を行う。
例）高齢者向け安全運転研究団体、交通事故研究機関など
他団体からの率直な意見をもとに改良点・本製品の強みを分析する。

［長期目標］
自動車内部に装備する自動ブレーキシステム(下図)と共存するかたちで、外部取付できる手軽な安全装置として販売する。



図2.Toyota Safety Sense (ⅲ)

まとめ

自動車は移動手段として一般的に利用されるが、同時に交通事故の主要な原因となっている。
ABOiD：アクセルブレーキ表示装置 は踏み間違え事故の抑制に貢献し得る装置であり、回避を促すという点で現行の安全装置とは一線を画す。
本製品の普及に向け、試乗会での体験を行うことで本製品の日常使いの適正について認知を拡大させる。
強制介入型の自動ブレーキシステムと併用することで交通事故を抑制し、安全なまちづくりを目指す。

参考文献
ⅰ.　交通事故総合分析センター.「統計表データからみる2025年交通事故の特徴」. https://www.itarda.or.jp/contents/11210/info_W04.pdf. (2026年7月29日閲覧)
ⅱ.　ソフトモビリティイニシアティブ.「ペダル踏み違い、これでなくしたい！」. https://www.soft-mobility-i.co.jp/2023/08/ichikawa_mama_matsuri_servey2023_02/
ⅲ.　トヨタ自動車.「ヤリス|安全性能」. https://toyota.jp/yaris/safety/. (2026年7月29日閲覧)

ポスターセッション 21

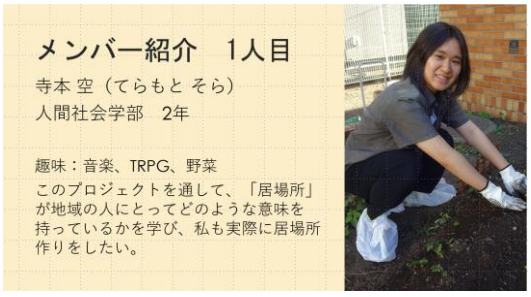
運営者/発表者
千葉商科大学人間社会学部プロジェクト実習 ： 域学連携～地域の居場所作り～/和田義人（教員）・学生４名
内容

このプロジェクト実習のゴールは、“地域の居場所作り”である。ただの場所作りではなく、コミュニティ・ベースド・ラーニング（CBL）にもとづいて住民や自治体、NPO、企業など多様なステークホルダーと連携・協働し、地域や社会が抱える課題の解決に向けてプロジェクトの企画立案・運営を行う。

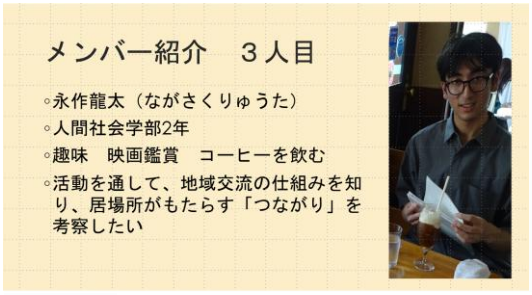
そもそも、わが国が直面する社会課題は多様である。特に暮らしを支える「社会保障制度」はもはや現状維持が難しい局面にある。そうした中で、新たな社会システムを”地域包括ケアシステム”という切り口で捉え、地域の”居場所作り”を域学連携（「官・民・学」が連携した地域密着型のネットワーク）で実践するプロジェクトである。

履修学生４名が以下の内容で発表を行った。

❶メンバー紹介









❷訪問先

＜ドルチェヴィータ（子ども食堂）＞



＜中山ベース・法華経寺参道商店街＞



＜菅野商店街＞



＜話飲茶屋「つぎはし」＞



＜DONADONA ドーナツ＞



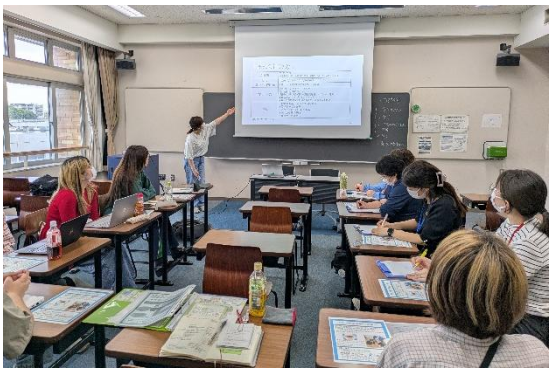
＜プレイパーク（市川あそびぼ）＞



4 名の学生が、春学期に訪問した 6 か所のサービス（居場所作）について、新たな気付き、問題意識について発表を行った。10 月からは、各自が考える“居場所（サードプレイス）”について、具体的な考察と企画提案を進めていく予定である。

ポスターセッション 22

運営者/発表者
千葉商科大学人間社会学部プロジェクト実習:有償ボランティア・プロジェクト/齊藤紀子（教員）・学生 5 名（青木萌衣、鈴木聖人、坂巻りりあ、櫻井玖心花、井上結愛）
内容
「地域の方々の困りごとを解決する有償ボランティア活動」 本学近隣地域在住の方々（主に高齢者）を対象とした生活支援サービス（PC・スマホ操作支援、電球交換、家具移動、庭掃除、ゴミ捨てなど）を提供するプロジェクト。2018 年に学生主体で設立した団体「よろず隊」を基盤として、有償ボランティア（謝礼金を受け取るボランティア）として運営している。 プロジェクトの到達目標として次の 2 点を挙げている ●履修学生全員が、生活支援サービスの担い手として地域住民のご自宅や福祉施設での活動に取り組み、受益者との直接的コミュニケーションを通してコミュニケーション能力・課題発見力を向上させること。また謝礼金受領、入金、帳簿管理によって収支管理能力を身につけること。 ●適性を活かした役割分担のもと、対外的な活動紹介・報告（プレゼンテーション)、問合せ・利用依頼への対応、より良い活動環境づくりなどにも取り組み、組織マネジメント能力を高め合うこと。 前期は、有償ボランティアとはどのような活動スタイルか、ソーシャルビジネスおよび労働者協同組合との比較のもと、理解を深めた。加えて、本学近隣地域在住の方々が利用可能な他の生活支援サービスの調査を行い、高齢者サポートセンター職員の方々に発表した。さらに、高齢者と学生がマンツーマンで交流するスマホ教室を企画・実施した。 後期は、福祉施設での有償ボランティア活動に取り組み、活動現場での気づきや問題意識、成果を報告書にまとめる。そして有償ボランティアに関する文献・資料を読み、同活動の課題や可能性について議論し、発表資料にまとめる。



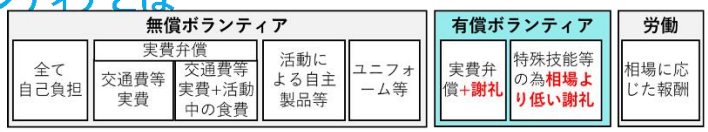
事例研究発表の様子



スマホ教室の様子

問い：スマホ教室の有償ボランティアとしての実施の値段はいくらが妥当か

有償ボランティアとは



よろず隊とは

地域住民のちょっとした困りごとを解決・生活支援
学生が空きコマを利用して活動する団体

スマホ教室とは

よろず隊の活動の一環で、大学生が高齢者の方にスマホの操作を教える活動



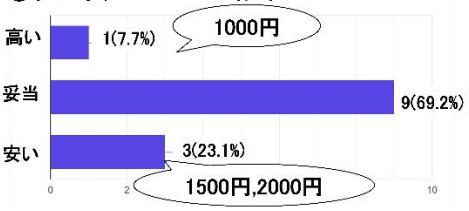
仮説

・スマホ教室の実施の値段は
　一人1200円が妥当なのではないか？
＜理由＞
・よろず隊の謝礼金額が15分あたり300円で、1時間だと1200円になるため。
・プロジェクト実習メンバーが企画・実施したスマホ教室が初めてであったため。

調査内容と結果

- **目的**：スマホ教室の有償ボランティアとしての実施の値段はいくらが妥当か
- **質問内容**：①満足度　②参加費　③今後の利用
- **調査対象者**：高齢者14名（地域の方）
- **有効回答数**：13件

②参加費についての結果



①満足度についての結果

とても満足	12人	92.3%
満足	1人	7.7%

③今後の利用についての結果



考察と結論

・仮説は妥当だといえる。
・参加者13人中9人から妥当であるという回答を得たため。ただし、スマホ教室リピーターの方々が大半で、よろず隊を信頼してくださっているため、初参加では高い値段だと解釈する可能性もあり得る。

ポスターセッション 23

運営者/発表者
千葉商科大学人間社会学部プロジェクト実習：アドベンチャーツーリズム・プロジェクト／権永詞（教員）・学生 13 名
内容

1. プロジェクトの概要

本プロジェクトは、近年注目を集めている観光スタイルであるアドベンチャーツーリズム（AT）の推進が地域社会に与えている影響を調査し、その結果を地域に還元することを目的とする。AT とは、身体活動、自然体験、異文化体験のうち二つ以上を含む旅行形態であり、地域の自然・文化と観光の共生を目指すものである。

本プロジェクトが対象とする地域は北海道の道南に位置する大沼国定公園とその周辺自治体（七飯町、北斗市、函館市、鹿部町、森町）である。プロジェクトは、四つのチームに分かれており、それぞれに資料調査と議論を重ね、研究課題と仮説を設定してきた。

2. 各チームの研究課題と仮説

①AT チーム

観光事業者の期待と不安の差に注目し、宿泊、体験、土産物・特産品販売、交通・移動などの事業者を対象とした調査を行う。売上や集客への期待は共通する一方、繁忙期への対応、渋滞、費用などのリスク認識は業種によって異なるという仮説である。

②サステナビリティチーム

森林と水辺における自然保護の目的・方法を比較する。森林では利用規制による生態系の「保存」、水辺では住民との連携による観光利用と自然の「保全」が重視され、その違いが利用ルールや環境教育にも表れると想定する。

③地域還元チーム

観光客への歓迎度と AT 事業の持続可能性を検証する。事業者は収益増加を期待する一方、観光に関わらない住民は混雑やごみを負担と感じ、歓迎度に差が生じるという仮説である。また、AT 事業の高単価が、閑散期の維持費を含む負担に見合うかも調査する。

④地域特色チーム

住民と観光客の域内移動を調査する。双方とも自動車を主な移動手段とし、公園内では徒歩やレンタサイクルも併用されると想定する。

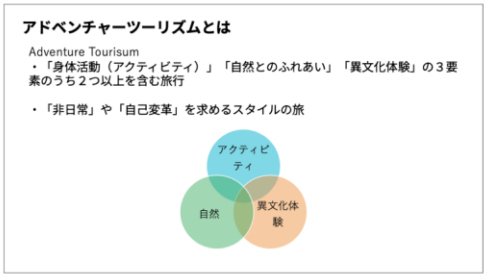
3. 今後の計画

9 月 21 日から 25 日に現地を訪れ、事業者、行政、森林管理機関、ボランティア団体などへの調査を通じて仮説を検証する予定である。後期には情報を整理・分析し、四つの視点を統合した報告書を作成し、現地での報告会を実施する。成果の地域還元を通じ、七飯町エリアにおける AT の持続的な発展への貢献を目指す。

アドベンチャーツーリズム・プロジェクト

担当教員：権永詞
メンバー：青田一花・市原雄貴・伊藤璃乃・内田そよ香・河瀬弘法・鈴木明依・関泰佑・津久井陽菜・鳥塚陵大・野田祐泰・星大和・森内蓮・森口翔呂葵

目標とゴール：アドベンチャーツーリズムの推進が地域社会に与えている影響を調査し、その結果を地域に還元すること

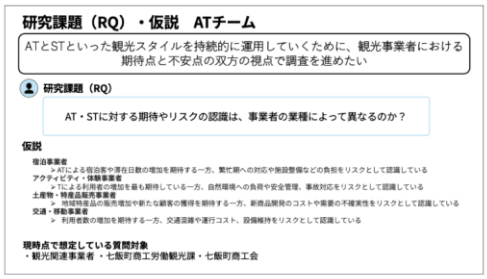


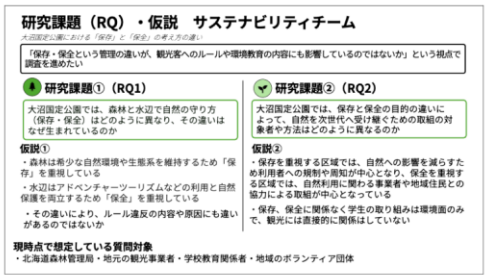


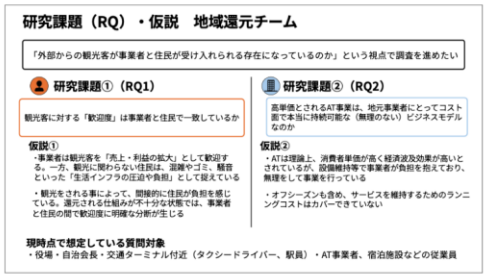


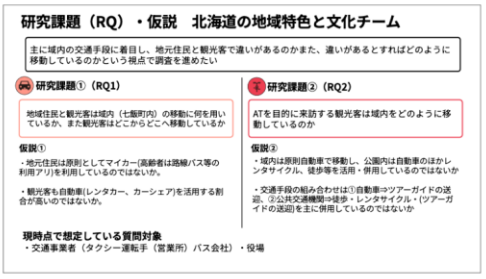


今学期の取組：「AT・サステナビリティ・地域還元・地域特色」に分かれリサーチクエスチョン、仮説の策定を実施









今後の計画：調査活動やフィールドワークから一次情報を収集・分析し、得た情報を報告書やプレゼン資料に整理し、地域に還元する

ポスターセッション 24

運営者/発表者
千葉商科大学人間社会学部プロジェクト実習：いちかわアートイベントプロジェクト／中倉智徳（教員）・学生 18 名
内容

1. プロジェクトの概要

本プロジェクトは、市川地域において、アートを地域に根付かせつつ、地域に新たなつながりを生み出し、コミュニティの活性化につながる企画を運営していくことを目的としている。具体的には、10 月 10 日開催の江戸川河川敷でのカワミューと、3−5 月開催予定の大門通商店街において開催される KUGURU 展との運営や、アーティストと地域とのつながりを担うことを目指す。そのことによって、学びを越えて、市川地域を変えていくアクターとして、学生の一人ひとりが役割を果たすことを目指す。とくに今回は、アートイベントであるカワミューでのチームごとの活動状況の報告をおこなった。

2. プロジェクトのチームごとの活動報告

①協賛チーム

協賛チームは、カワミューの活動を支える協賛企業の募集ややり取りを、実行委員と連携しながら担った。千葉商科大学キャリア支援センターと連携し、声掛けを行う企業を選定し、実際に学生がアポイントから協賛後のインタビューまでを行った。目標金額を超えるかたちで活動できた。

②広報チーム

広報チームは、カワミューの公式SNSや学生チームSNSの更新を主な活動としつつ、Spotifyでのカワミューラジオの更新なども担った。youtube 出演なども行った。実行委員との連携のなかで、記事内容を検討し、SNS フォロワー数増加などの成果があった。

③ワークショップチーム

カワミュー当日の缶バッジ制作のワークショップに向けて、企画から実際の運営までを準備した。

④物販チーム

新しいグッズのハンドタオルとリストバンドの企画から製作、販売までを準備した。

⑤図書館展示チーム

10 月に市川駅南口図書館で行われるカワミュー展示企画の準備、運営を行った。